
家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

難波 壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 自由な風、来る！〜改〜

【Nコード】

N6945Y

【作者名】

難波 壱

【あらすじ】

『家庭教師ヒットマンREBORN！ 自由な風、来る！』の改版です。

風間南は交通事故に巻き込まれ、死んでしまった。しかし神の手違いだったため『転生』することになった！転生先は『家庭教師ヒットマンREBORN！』の世界！！面倒くさがりや&自由過ぎる性格の南はどうするか！？

南の第二の人生が幕を開ける…

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 1 登 場 人 物 ！ ～ 1 ～

カザマ ミナミ
風間 南

性別 女

年齢 12

身長 165cm

体重 45kg

一人称 オレ

誕生日 9月7日

性格 自由、冷静、興味ないと全然反応を示さない、面倒事が大嫌い、仲間は人一倍大事にする

髪の色 茜色

目の色 黒

髪型 ショートカットで、毛先が外側にハネている

目の形 フランと同じだが、目の下の▼は無い

ファッション 黒、白、青、緑、赤、などの男モノ系

アクセサリー 金属（銀色のみ）、黒や白っぽい色のモノ
（シンプルなモノ）

ピアスを両耳3つ付けてる

必需品 ケータイ、財布、iPod touch、リングペンダント、小型ノートパソコン（電子辞書サイズ）

十雅^{トオガ}（神）

性別 男

年齢 不明（本人は『3万年以上は生きてると思うんだけどなー』
と言っ）

身長 175cm位（南の予想）

体重 不明

一人称 オレ

誕生日 不明

性格 前向き、好奇心旺盛で思ったことはすぐに行う、余計なことを言うことが多い

髪の色 金と銀が混ざったような色

目の色 空色

髪型 南と同じ位のショートカットだが、天パ

ファッション ラフな服装

アクセサリ 特にない

必需品 特にない

ヤマシタ サキ
山下 咲

性別 女

年齢 12

身長 148cm

体重 44kg

一人称 私

誕生日 12月15日

性格 明るい、誰にでも優しい、無邪気、自分では気づいていない
が自分第一で自分勝手

髪の色 茶色

目の色 茶混じりの黒

髪型 ロング（腰あたりまでである）だが、いつもはお団子にしている

ファッション 清楚系（特に白、薄ピンク）

アクセサリ かわいいものが好き

必需品 ケータイ、ポーチ（くし、鏡など）etc

名前の由来を話しておきます。

まず、主人公の『風間南』。

『南』は男でもありそうな名前にしたかったからです。

『風間』は…。

三文字がいい、と思って、そこからは何となく…。

『十雅』は…。

『神』＝『GOD』（逆から読む）『ゴッド』↓（何かがあった）

『十雅』です。

何があったのかは…。

私の気まぐれでこうなりました。

そして『山下咲』。

これも何となくですね。

あるとしたら、名前順とかいなる時に後ろの方にさせたかったです。

『や』だと南の苗字、『風間』と離れるので。

こんな理由があつてこのような名前にしました！

これからも新キャラ出す時に由来を話していこうと思います♪

Episode 1 むかつく神と会う！

オレの名前は風間南。

性別…女。

なつたばかりの中学1年…とはいっても私立の小学校から中学になっただけだからあんま変わんねエかな。

今は、ズボンの制服着て、カバン持って信号待ち中。

あ？なんで女なのにズボンの制服かって？

ンなモン、スカートなんて着たくねエからに決まってるんだろ！

あ、信号が青になった。

「ふう…」

オレはゆっくりと信号を渡り始める。

メンドクサイ。何もかもが。

学校行つて何になる？

オレには何にもならない。

…もう、アイツはいないから……。

「…つまんねーの」

そう、呟いた時だ。

キキイイイイツツツ！！！！！！

ドカァァンツツツ！！

「! ! ! ? ? ! ? ! !」

オレのすぐそばでトラックと軽自動車の交通事故発生。

あ。

オレのほうに来る!!?!?!?!?

ドンッッッッッッ！！！！！！

オレは見事に巻き添えをくらい、どれだけのスピードをだしていたのか、数メートル先まで飛ばされた。

「キャアアアツツ！！！！」

「おいっ！ 意識はあるか！？」

「き、救急車を呼べ！！！」

オレの近くでうるさい声がする。

あー、意識はあるよ…。

??この赤い血みみたいな液体は？

あ、オレの血？

そつだよな、巻き添え食らったもんな…。

死ぬのかな…。

ま、いつか。

悲しむ親はとつくの昔に死んだし……。

それに、親はオレが死んでも喜ぶだろうし…。

ああ…これでアイツのところに逝ける…？

思い出す…今までの人生を……。

…懐かしいな…。

「おい！！ 死ぬなよ！」

「大至急来てください！！」

ああ、救急車、呼んだのか…。

でも…。

オレは眠いから…。

「ろ…きろ…起きろ、風間南!!」

「……」

起きたけど、知らない声なので寝たふりだな。

「起きてくださいよ——」。

じゃないと、オレはず——っとオマエを呼ばなきゃいけないんだ
よ——」

…それはづいいな。

「…なんだよ」

「おっ ようやく起きたか」

目を開けるが、やはり知らない男。

髪の色は金と銀が混ざったような綺麗な色で、目は空色。

外人か…？

「で？誰だよテメエは」

「ん？神だ！」

「冗談はいいから誰だよ」

「だーからー！！か・み・さ・まー！！」

.....は？

「信じてねエって顔してんな...」

「アタリマエ。」

どこにいきなり『神』つつわれて信じる奴がいるんだよ」

「え——？ 案外いるぞ？」

「...本当にそんな奴いたら見てみたいな」

「まっその話はおいというて。」

「なんでここにいるか分かるか？」

「こっつつわれても.....」。

なんもない、あたり一面真っ白。

来たことが無ければ、見たことすら無い。

真っ白過ぎて天井があるのかも分からない。

あ……。

「死んだ……からか？」

「おお——！オマエは優秀だな——！正解だ」

「やっぱりなあ……。」

「んで、オレになんか用？つつかここドコ？」

一番疑問に思っていることを聞いてみた。

「ここは……まあ、狭間みたいな場所だ。

神と、神が許可した者した入れねーんだぜ！」

あー、こーやって『自分は本物の神様です』と伝えようとしてんのか…。

残念、オレにその手は効かねーよ。

「反応薄いな…まあいいけどよ」

「で、どうして死んだからって狭間なんかにいるんだ？

天国なり、地獄なりに早く連れてけよ」

オレとしては、アイツがいる場所希望だな。

「ああ、じゃあ説明しないとな……悪い」

…いきなり頭を下げて謝られた。

「何が？」

するとこの男はバツの悪そうな顔をし、こう言った。

「オマエが死んだの、オレの手違いなんだわ」

……………。

「さ、殺気を収めてください…」

今度はビクビクしながら言ってきた。

「あのさー、そんなの無理に決まってるよな？」

勝手に殺されたのに、さらに謝罪の気持ち^が全く入ってない謝り方。

…ケンカ売ってんのか、このクソ野郎？」

オレは満面の笑みで言ってやった。

目は笑ってないけどな。

「じつごめんなさいイイ」

男はとつさに土下座した。

うん、正しい判断だな。

「それでいい。ずっとそのままにいる」

「ハイ…」

「で？オレはこのままよく分かんねエこの真っ白な世界で生きていくのか？」

「いえ…転生してもらいたいのですが…」

は…？

転生？

よく小説とかである、あの転生か？

「なんでだよ」

「普通喜ぶ場所だと思いますが…」。

理由は、あなたは本来まだ生きているので、天国にも地獄にも逝けないんです」

逝くって…。

「なので、ほかの…つまり、さっきまで居た世界とは別の、元から“風間南”という人間が存在しない世界にいつてもらいいます」

「オレが…元からない世界？」

「ハイ…そうすればあなたは生きられますし、オレも面倒なことしなくて済みますしね」

てへっ、と右手を頭に当てながら話す男。

ピキイッ！

あ…オレの中の何かが切れた。

「それで、行く世界なのですが…って、え!?

やめてくださ…。

ぎゃあああああつつつつ!…!…!…」

「んで？どの世界に行くんだ？」

オレは、全身ボッコボコになった男に向かって聞いた。

なんでこんなにボッコボコになってんだろっな。

笑えてくる。

「か…『家庭教師ヒットマン^{かてきよー}REBORN^{リボーン}！』の世界です…」

「！？リボーン！？あれはマンガの世界だぜ！？？」

「はい……ダ……ダメですか……？」

男はビクビクしながら聞いてくる。

「……メンドクせーけど、いいぜ……原作も知ってるしな」

知ってる、つってもせいぜいジャンプで読んで、小説はレンタルで読んだ程度だけだな。

だから正確にはあんま覚えてない。

確か……アレだろ？

戦い嫌いなダメ人間の沢田綱吉がリボンと会って、マフィアに連れていくっていう……。

ま、テキトーに過ごそう。

オレが言つと男は花が咲いたような笑顔になり…。

「じゃあ、すぐに行きましょう!！」

立ち上がってオレに手を向けた。

「は？ちょい待て…ってホントにすぐかよ!！」

オレの全身が白く光り始めた。

絶対今すぐ行くことになんだろ!!

まだ聞きてーことあんのによ!

「それじゃあ、第二の人生楽しんでくださいっ!!」

「このッッ!!」

次会った時覚悟してろよ——!!!!」

——ここでオレは意識を失った。

真っ白な世界…狭間に1人残った神。

「や、やっぱりもうちょい時間かけてからにすればよかった…」

今更後悔している。

だが、もう遅い。

南はこの男、神に次会った時にどうするかを決めているのだ。

「あ、オレの名前教えるの忘れた…」

また後悔が増えた神だった。

Episode 2 神からの贈り物！

…ここは？

オレは確か…。

ああ、そうだった。

勝手に神に殺され、さらに勝手にリボーンの世界に転生させられたんだっとな…。

でもここはどこだ？

オレはベッドで寝ていた。

辺りを見渡すと、なんだか見慣れた風景。

なんだ、オレの家じゃん。

起き上がると、紙が一枚。

こんなモノ、オレは置いてなかったな。

…誰からか、想像できたので読んでみた。

『どうも！神です！』

これは、言い忘れたことを伝えるために書きました！

まず、オレの名前を教える。オレは十雅^{トオガ}！！

いくら神だつて、名前くらいあるんだぜ？

今度会ったときは、十雅^{トオガ}って呼んでくれよな！

次に、オマエが今いる場所は、この世界でオマエの家となる場所だ！

かなり高級マンションだからな。

もちろん一人暮らしだ。

冷蔵庫に一週間分くらいの食いもんは入ってる。

贅沢な生活ができるぜ！

次に…この世界でのオマエの設定だ。

両親はすでに他界。

理由は、前世の両親と同じだ。

今は中学生だ 沢田綱吉と同じ学年だからな。

まあ、オマエ自身の情報は前世からの続き、といった感じだな。

前の学校を辞めて、並盛町に引っ越し、並中に通うことになった。

まあ、こんな感じだな。

制服はもちろん男子用。

許可も貰ってあるから安心して登校しろ。

ああ、クローゼットの中に入ってるからな。

学校に持っていくものはベッドの横に置いてあるカバンの中に入ってるからな。

そんなのモノも説明しとくか。

まず、並中の学生証。

次にケータイ。

これはオマエが前世で使っていたモノと全く一緒だ。

三つめは財布。

金は五千元程度だが減ったらオレに言えよ！

生活しやすいくらいに増やしてやるから。

家賃や光熱費もだしてやるよ。

んで、i P o t t o u c h 。

これは、無いと暇つぶしできねエだろ？

最後に、オレからの贈り物だ！

小型ノートパソコンの形をしているが、特殊能力のようなものが

いっぱい入っている。

もちろん、普通にパソコンとしても使えるからな。

かなり軽いから持ち運びも便利だぜ！

家にあるものは前世のオマエが持っていたモノに少し足した程度だ。

…まあ、こんくらいかな。

じゃあ頑張れ！

オレのことを呼べばオレは出てくるし、オレに会いたいって思いながら寝ればさっきの狭間の世界でオレに会えるからさ！

じゃーな！

十雅』

かなり長い手紙を読み終え、ベッドの隣に置いてあったカバンを取る。

革製じゃない、フツのスクールバッグの黒。

なんだ、これも前世と同じかよ。

なんか同じモノばかりで転生したって感じしねーな…。

中身を確認すると、手紙に書いてあったものが入ってた。

並中の学生証。

…ああ、やっぱりオレは転生したんだな…。

この世界には、アイツはいるんだろうか？

前世でのたった1つの悔い。

…もう二度目の人生だ。

この人生で悔いは絶対にしたくない。

そう思い、時間を確認する。

7時10分頃。

転校初日に遅刻はしたくないので朝食を作る。

…とはいっても、パンを焼くだけ。

そして制服に着替え、前世でも常に付けていたリングネックレスをつけ玄関に行く。

鏡を見たところ容姿は前世と変わっていなかったので安心した。

…もし変わってたら鏡見るたびに『誰だ？』になるしな…。

ま、よかったな。

重たいドアを開け、家を出る。

ああ…前世の家を出た風景を随分違う。

……もう、オレが知っている風景は家以外に無いのか…。

後悔や、名残惜しい気はしない。

ここから…今から、オレの人生は始まるのだから。

こうして、オレの第二の人生が幕を開けた。

Episodio 3 並中！

「あーあ…疲れた」

オレは今登校中だ。

只今の時刻、7時40分。

ダルイからゆっくり支度した。

それにオレは朝弱いからな。

ハア、とため息をつき並中へ向かう。

なんで並中の行き方が分かるのかって？

……ホント、何でだろうな。

まあ…迷うよりマシか。

だんだん並中が視界に入ってきた。

ふむふむ。確かに並中だ。

どんなだったかは忘れたが、『並盛中学校』って書いてあるし。

オレはゆっくりと並中に入っていった。

登校時間は約8分か。

良くも悪くもない。

近すぎるのは嫌いだし、遠いのも嫌いだからな。

ちよつとだけ十雅に感謝した南であつた。

同時刻、応接室。

「草壁、今日転校してくるっていう転校生の書類は？」

並盛最強といわれている雲雀恭弥が自分より、はるかに大柄でリーゼントの男に聞いた。

「それが…」

草壁といわれた男は少し戸惑いながら言った。

「名前、住所、電話番号といったもののしか分からなかったのですが

…」

「……………」

「い…委員長？」

返事をしない雲雀を不思議に思つて、草壁は雲雀に声をかけた。

雲雀は無言で草壁から、少ししか書かれていない転校生の書類を取る。

「風間南…久しぶりに楽しめそうだよ」

雲雀は楽しそうに南の書類を置いた。

そんなことも全く知らず、南は職員室へ向かう。

自分のクラスが何組かを知るためだ。

「今日、転校生が来るんですって？」

「そうなんですよ。私のクラスになりました」

一人の女性教師と男性教師が話していた。

おそらく今日来る転校生は南のことだ。

「1 - Aですか。風間さん…でしたわよね？」

「ああ、風間南というらしいですよ。問題児でないことを祈るばかりですね」

南はそれをしっかり聞いていた。

だが、別に怒っている気配はない。

『教師が新しく来る生徒は問題児ではないことを祈るのなんて普通

じゃね？』

と思っているからだ。

「1 - A ね…」

南は職員室に行かなくてもクラスが分かったため屋上へ行くことにした。

『並中といえど、やっぱり屋上だよな！』という理由からだが…。

「おおー、ここが屋上かぁ…」

まだ朝早く（といってももう7時50分は過ぎているが）屋上には誰もいなかった。

ここで南に疑問が一つ。

今、原作開始からどのくらい前、または後なのか。

「…………まあ、教室行ったら分かるか」

考えても無駄だと分かり南はポ——っとしていることにした。

キンコーンカーンコーン…。

学校中にチャイムが鳴り響いた。

「8時の予鈴か…ふああ…」

南を睡魔が襲った。

改めていうが、南は朝がとても苦手だ。

もちろん睡魔などに勝てるハズもなく、勝とうともせず――。

南は壁に寄りかかってグッスリと寝てしまった。

キンコーンカーンコーン。

「……んー？8時25分の予鈴——？」

仕方ない…そろそろ行くか…」

南は珍しくしっかり目が覚め、ゆっくりと教室に向かって行った。

「席に着けー。転校生を紹介する」

あれから教室に向かい、担任に『よく教室わかったなあ』と言われた。

時間もギリギリではあったが間に合った。

「よし。風間ー、入って来い」

「……」

無言でドアを開け、教室内に入る。

「転校生の風間南だ。風間、自己紹介をしろ」

教師は黒板に『風間 南』と書いた。

「風間南だ…。あー、一応女子だけど、まあ気にしないでいい。

…席ってどこだ？」

『自己紹介か？アレ！？』と言いたそうな奴が何人かいるがドードモいい。

『かつこいい…』とか言ってる奴もいるが、無視だ無視！！

「あ…ああ。その、一番窓側の席だ」

見ると、一番窓側で一番後ろの席が空いていた。

そのままその席に歩いて行って座った。

原作はつと…。

教室内を見渡すと、まだ獄寺もない。

原作開始前なのか？

…まあいいか。

オレは眠いので寝ることにした。

「よっ十雅!!」

ただ寝るのもなんだかつまらないと思い、十雅に会いにいったのだ。

「あ、来たか!んで、どーかしたか?つてまた——!!?」

ぎいやああああ……!!!!」

「当たり前だあ!!よくも待てと言っているのに勝手に送り込みやがったな!!」

名前で呼んでもらったのを感謝して欲しいくらいだ!!」

「うう…すみません…」

十雅は正座して言った。

「ふん…まあいい。」

それより、今原作開始までどのくらい時間あるんだ？」

「えっと…体育の授業から開始です」

「いつのだよ」

「え…それは…忘れちゃいボブウ…!!」

十雅が忘れた、と言いつうになった途端、南のアップパーがヒットした。

「使えねーな…じゃあオレはもう行く。

じゃーな！」

「あー！ちょっとちょっと待って！

…っってもういね——！！！！

言い忘れたことがあったのにいい！！！」

十雅の叫びがこだました。

パチッと目が覚めた南。

「ねえねえ風間さん！」

「どこから来たの？」

ワイワイと知らないうちにオレを囲んで群れができていた。

イラッときたのは言うまでもないだろう。

「風間さあーん！」

「…つるせえ。こっから去れ。」

目障りだ」

「かつこい——！！」

「キャ——！！！！」

本当にウルセエの、わかんねーのかよ…。

ああ、なんかもうメンドイ。

サボってかーえろっ！！

「いいから散れ」

オレが殺気混じりに言つと、皆が散つた。

ふう…これで帰れる。

今は休み時間。

教師が来る前に、と思いカバンを取る。

そして、のんびりと帰った。

帰り際に南は思った。

『転校初日からサボって大丈夫なのか』

しかしそんなことを気にする南ではないのだった。

Episode 4 雲に会う！

並中に通うことになって、2日目。

1日目はかったるくなって帰った。

「あー、教師に何か言われそーだな…。

ま、無視すりゃいいか」

南は前世で、学校に毎日行くような人間では無かった。

しかし、それで教師に怒られたことは無かった。

だから今、南はのんびりと学校に向かっている。

それも既に遅刻している。

今は9時。

それなのに南は決して焦らない。

そして学校に着いた。

ガララッ。

教室のドアを開けると、教師も生徒も皆、南を見る。

「キサマは転校生の風間だな!？」

教師が聞いてくる。

「…だつたら?」

「遅刻だ! 転校初日は無断早退。二日目は遅刻。

全く…とんでもない問題児が来てしまったようだな…」

ワザとらしく、声を大きくして言うてくる。

「学校来て何になるんだよ? オレにとってこの学校のレベルは低すぎる。だからタイクツ。

それに、問題児だと言いたければ言えればいいじゃねえか。オレは何だっていい」

ドカツ、と椅子に座る。

周りが『あの根津が押されてる!!』『すんげーいい気分♪』とか言っている。

根津、というのはこの教師のことだろう。

「……いいだろう。このことは校長にも話しておくがな。」

では、風間を無視して授業を進める!!」

根津は授業を再開した。

だが南には、タイクツで仕方ない。

そして何を思ったのか、ふと席を立った。

「……今度は何だ!!」

ため息交じりに聞いてくる。

「……………オレを無視すんじゃないかったのか?」

「ぐっ……」

南はそのまま、教室を出た。

向かったのは、屋上。

誰もいない、静かな場所に行きたかったのだ。

ギィィ…。

屋上へと続く、ドアを開ける。

「…あり？先客がいたか…」

屋上には、学ランを着て眠る男子生徒がいた。

そしてその男子生徒は南に気付き、目を開ける。

「君…誰？今は授業中のはずだけど」

「授業なんかつまんねーから抜けたんだよ」

「…その赤い髪…1 - Aに転入した、風間南だね」

男子生徒は立ち上がりながら聞いてきた。

「おっ、正解」

「君は昨日、無断早退をしていて、今日も遅刻している…」。

僕が今、ここで咬み殺してあげるよ」

「楽しそうだが、断る。ここで並盛最強の男、雲雀恭弥と戦いたくはないからな」

すると、ピクリ、と反応した。

「…やっぱり、僕のことを知っているのか」

「ああ。武器は仕込みトンファー。並中大好きな風紀委員長だろ？」

「……君、一体何者？」

男…雲雀はトンファーを構えながら聞いた。

「そんなに警戒しなくても…。オレは風間南、それ以上でも、それ以下でもない、ただの一般人」

「一般人なわけないよね。現に君の情報をあまり得られなかった」

「（あーそりゃそうだろうな…）それは残念だったな！。

じゃあオレは学校嫌いな自由を好む者、とでも考えておいてくれよ。

そして秘密主義者、とでも」

ケラケラ笑いながら南は言う。

何を思ったのか、雲雀はトンファーを下げた。

「……どーしたんだ？」

「今、君を相手にしてもつまらなそうだからね。殺^やる気がある時じゃないと戦わないタイプだろ？」

「おっ正解♪情報に追加しておけ。『気分屋』とな」

「どーでもいいよ」

キンコンカンコン。

チャイムが鳴り響いた。

「あー、次は体育だったな…」

「次の授業には出なよ」

「えー…（あ、まてよ…確かにボーンの始まりって沢田がボールに顔面直撃するところだ…）」

「はあ、わかったよ」

「じゃあね」

「おう、またな」

こうして南は屋上を出て行った。

そして教室には戻らず、そのまま体育館に向かう。

つまり、制服のままで。

雲雀に『授業に出ろ』と言われて『わかった』と答えたのに、早速約束を破っているが…。

「ん…ここか…」

体育館の目の前に立ち、呟く。

もう授業開始のチャイムは鳴っていて、中では授業中だろう。

再び怒られるのもメンドクサイので、南はこっそりと見ることにした。

もちろん、主人公である沢田綱吉を。

「ぶっ
」

ベチャツ、と沢田の顔面にボールが直撃した。

「……アイツが運動神経無いのは知っていた………だけどもさか……ここまでは……」

南はリボーンの最初の頃の話知らない。

読んでいたが、黒曜編に入るまでは何となく流し読みしてた程度だった。

第一話はしっかりと読んでいたのだが…。

なので知らないに等しい状況だ。

「……アレがりボーンと会って、あんなに変わるのか……」

沢田のダメダメっぷりを見ながら、南は呟いた。

それから数分経った。

沢田のダメダメっぷりに呆れ、南は帰り始めた。

「さて…これから楽しませてくれよ…？」

遠くから誰にも聞こえないほど小さな声で、そう、言い残して。

Episode 5 霧に会う！

「いよっしゃー！！学校休みイ！！！」

今日は学校休みでテンションMAXなんだ♪

え？学校あつてもサボってて休みみたいなモンだろって？

気分が違うよ、気分が〜。

休みみたいなことに否定はしないけどな！

だつてさ——。

学校サボったらあの風紀委員長サンがオレを咬み殺しに来るんだもん……。

ああ、球技大会の日もサボって、商店街ウロウロしてた時に会ったのは大変だったな…。

「どーしよっかな――」。

アイスでも買って食うか!!」

そう言い、オレは家を出た。

並盛商店街。

オレは今、手にアイスが二個入ったビニール袋を持って歩いている。

なんで二個もかって？

チョコと抹茶と悩んだんだよ。

どうせ十雅の金だしいいや！！ってな。

でも持って帰るとアイス溶けちまうからな――。

お！！ベンチ発見！

ベンチに座って食うか♪

オレはベンチのある公園に向かった。

「誰もいね——。まあ、よかったな……」

公園には誰もいなかった。

オレ的には超嬉しいぜ？

うるさいガキ共がいなくて。

オレはベンチに座り、抹茶アイスを食べ始めた。

数十秒経ったら、公園に一人の女の子が来た。

オレと同じ年齢ぐらいだと思う。

…なんか見覚えあるんだよね。

藍色っぽい肩下まである髪、同じく藍色っぽい大きな瞳、そして真っ白のワンピース。

誰だっけな？

クラスの奴ではないと思うんだけど…。

悩むのもイヤだし、声をかけてみるか！！

「おい！！オマエ一人？一人ならオレとアイス食わねエ？」

少女は突然声をかけられたことに驚いた様子。

「オレ今もう一個アイス持ってたんだ。つい買っちゃったんだけど、溶けちゃうからさ！！」

食ってくんねエ？」

「いいの…？私が食べて…も…」

「いいのってか食ってくれ！！」

「…ありがとう」

少女は顔を少し赤くして、オレからチョコアイスを受け取り、隣に座った。

「どういたしまして。オレは風間南」

「私は…風…」

「ああ、よろしくな！風！」

そして軽く挨拶をして、黙々とアイスを食べる。

「なあ、風とオレって前にどこかで会ったっけ？」

「え…無いと思う…」

「だよなー…」

でもなんか知った声なんだよ…。

リボーン的主要キャラ？

でも女キャラで……。

………ん？

クロームってキャラがいたな…。

確か骸の代わり、とか…。

んん？

…クロームはもう一つの名前があつて……。

「あ……そうだ。だから見覚えあんのか」

「？」

声に出したから、風が不思議がつている。

クロームⅡ風だったんだよな…。

原作に出たのは少しだったし、小説はうる覚えだしな…。

「あ、いや……なんでもねえよー！」

「うん…」

気づけばもうアイスは無くなっていた。

「…なあ、風はまだ時間あるか？」

「えっ…う、うん!!」

「じゃあ、一緒に遊ばねエ？」

「い…いいの…？」

「もちろん!!」

つつかオレ的には遊んでほしいしな♪

「…ありがとう。でも、どこ行くの？」

「んーと、ちょっとついてきてくれるか？」

「うん…」

そう言い、オレ達は公園を出た。

「ここだ!!」

オレは風に言う。

「……?」

「ああ。『ラ・ナミモリーヌ』つつつて、ケーキがかなりウマいらしいぜ!!」

来てみたかったんだよ!! ココ!!

「ケーキ屋さん？」

「そうらしいぜ！オレも来たことないんだけど…。とにかく中入ろう！」

店の中に入った。

「いらっしやいませー」

おお、ケーキのいい匂いだ。

「呔、どれが食べたい？」

「あ…私、お金持っていないから…」

あー、散歩してたような感じだったしな。

「いって！オレがおこる。ついてきてもらったんだし！」

「でも…」

「いって、いって！ほら、ウマそうだぜ？」

「…ありがとう」

「どういたしまして。」

オレはチーズケーキにしようかな…風は？」

「あ…同じの…」

あー、こりゃ遠慮してんな…。

「分かった。ちょっと待っててくれよ！買ってくる」

「…うん」

そして、ケーキを買い、凧と二人で食べた。

「ウマかった——！！！！噂は本当だったな！！」

「あの……ありがとう……風間……君……」

「南でいって。ちなみにオレ、女だぜ？」

「え……」

凧は足を止めた。

「あ……ごめんなさい……！」

「い、いや……しゅっちゅうあることだし、気にすんな？」

「でも……」

ま、性別間違えるなんてしちゃったら気にするよな……。

オレは別にいいけど。

「んじゃあさ、一つ約束してくんね？」

「約束……？」

「ああ。また遊んでくれるか？」

すると風は満面の笑みを見せた。

「うんー!」

「んじゃ、それでチャラっことぞ」

「でも…そんなのでいいの?」

「オレは全く気にしてないからいいんだって! あ、あとメアド教えてくれ」

「あ、うん…」

赤外線通信をして、登録する。

あー、そついや登録一人目だな。

前世ではアイツだけだったし…。

ふっ、と笑みが零^{こぼ}れた。

「??どうしたの?」

「あ、いや…何でもねえよ。んじゃ、いつでも連絡してくれよ!」

「うん!」

じゃあな、とお別れをして家に帰った。

二度目の人生で、初めて友達ができた瞬間だった。

Episode 6 風紀委員！

よっす！

南だ！！

皆さんに一つ聞いてもいいですか？

あなたはグッスリ眠っています。

時刻は朝の5時です。

その刹那、携帯電話が鳴り始めました。

マナーモードにしていなかったので、『プルルルルル』と音を鳴らしています。

携帯を見ると、知らない番号。

知らない人でしたし、もちろん出ません。

しかし、その電話は一回切れても何度も何度もかかってきます。

もう5分は経ちました。

でもまだ電話は鳴り続けます。

さて、どうする！？

その？ 電話に出る

その？ ムシを続ける

その？ 電話を切る

オレがとつた行動は、？だ！！

理由？

なんかオレの第六感が、『出ないともっとヒドいことになる』って察知したからだよ。

「もっしーし」

『君、喧嘩売ってるの?』

「!?!この声、オマエ雲雀か?

ったく何の用だよ…。休日こんな朝早くに…」

『10分以内に応接室来て「無理に決まってるだろ!!それにイヤだし!!」」

来なかったらどうなるか分かるよね?』

「…ワカリマセンガ?ソレガナニカ?」

『まあいいや。じゃあね』

一方的に電話をかけられ、電話を切られ…。

「オレって不幸…」

行かないと咬み殺されるんだろうな。

メンドクサイけど、戦うことになった方がメンドイ。

「仕方ない…。行くか」

オレは嫌々私服に着替え、朝早い並盛町を歩いた。

「ンで？何の用ですか——？」

ガラッ、とドアを開けながら言う。

「来たんだ。僕が家に行つて咬み殺さなきゃいけないかと思つてたよ」

「は！？家つて…場所知つてんのかよ！？」

「校長に聞けばいいだけだよ」

「……………なら来てよかった…」

うん…本当よかった…。

「でも、なんで私服で来たの？休日とはいえど、ここは学校だよ？」

ヤバイ！！！！

南は直感した。

今の服装は、黒いダメージジーンズ、紫色のガラの入った長Tシャツの上に緑色のパーカー。

指や手首にはアクセサリが付いている。

遊びにでも行くの？と言われそうな、到底学校に行くような格好ではなかった。

しかし……。

「まあいいや。それより今日は君に話があつてね」

よ……よかったあああああ……！！！！

極悪非道の並盛中学校風紀委員長様から許しが出たよ……！！

「話？」

「うん。君、風紀委員に入り「無理」」

即答したよ？

うん。

「断るのなら、学校に私服なんかで来た罰として咬み殺してあげるよ」

「そ、それは丁重にお断りシマス」

「ほら、ここにサインしなよ」

「オイオイオイオイ、勝手に話飛んでね？いつの間にオレが許可したみたいになってんの？！」

「うるさいな。早く書いてよ」

話聞けよ！！コイツ！！！！

「む、無理！！って何オレに差し出して「契約書だよ」

あ、契約書？イリマセンケド？」

「だから、君に拒否権はないんだって何度も言ってるでしょ？

早く書いてくれない？僕眠いんだけど」

「オマエが朝5時に呼びだしたんだよな！！」

…条件次第で入ってもいいぜ？」

ここで、ピクリ、と雲雀が反応する。

「…条件？」

「ああ！

一つ目、オレは朝早くに学校に来るつもりはない。一般生徒と同じ時間に登校する。

二つ目、無断欠席、無断早退、遅刻、そういったものを全て許可する。

三つ目、オレの武器の所持を認める。

四つ目、もしもオレが誰かと仲良くなって、そいつと一緒にいて

も攻撃しない。

五つ目、中学校は三年間通って、卒業したら風紀委員は抜ける。

…まあ、こんくらいかな」

オレは一、二、三、四、五、と指を立てながら話した。

最後のが変だつて？

未来編を覚えていますか？

『風紀財団』なんてものがあつたでしょう？

あれは並中風紀委員を母体としてある組織ですよ？

ハイ。『？』ばっかでゴメンナサイ。

「……………」

雲雀は数秒考えている。

オレは風紀委員に入る気なんてないのさ！！

こんだけ条件を付ければ諦めて、

「い い よ」

「いいのかわよ!？」

くれなかった。

「どうせ、『これだけ条件を付ければ諦める』とでも思ったんでしょ。」

「残念ながらそうはいかないよ」

[illegible]

オレの悲鳴が朝早い校舎に響いた。

「うるさいよ。早くサインしてくれる?」

「くそ…なんでこんな条件つけてまでオレを風紀委員にさせたいんだよ…」

サインをしながら聞く。

「君は面白そうだからね」

「それだけかよ…あーもー疲れた」

サインをし終え、ソファーに座る。

ふう、とため息をついた時。

「失礼します！」

委員長！新しく風紀委員に入る者がいると聞いたのですが…」

あ——、副委員長の草壁サンだ——。

「本当だよ」

「そうですか…。？この人は？」

そう言い、オレの方を見る草壁さん。

「今日から風紀委員に入ることになったしまいました、風間南ツス
よろしく願いしやーす」

「君だったのか…私は副委員長の草壁と言います。あの、こちらを…」

手に持った紙袋を渡された。

「…これ、なんですか…？」

「それは学ランです。風紀委員になった者には着用してもらっているのです」

「……それって女でも着なきゃダメっすか…？」

オレの言葉を聞いて、驚いている。

ま、そうだよな…。

私服も全て男モノだし…。

「…女子……？」

「ああ。オレは一応女子っすよ……。それでもダメっすか……？」

数秒考える草壁。

そこに雲雀が口を挟む。

「いいんじゃない？風間南は普段も男子用制服着てるからね」

「オマエは黙れよ……！」

「あ、それならよろしくお願いします」

くそう…雲雀が口を挟まなければオレは今まで通りでよかったのに…。

「腕章は委員長が持っていますので受け取ってください。」

それでは、失礼しました」

それだけ言い残し、草壁副委員長は応接室を出て行った。

ああ、そうだ…。

腕章もあんのか…。

「腕章って付けなきゃダメだよ。付けないと言っのなら、僕が今すぐ咬み殺してあげるよ」「」

即答——！！！！

「じゃ、じゃあさー!!せめて学ランの着方はオレの自由にさせて!そうしてくれたらちゃんと付けるから!!」

「ハア…どの道腕章は付けさせるけど、それくらいは自由にさせてあげるよ。」

その分仕事は増やすけどね」

「エ————……」

「変更は認めないよ。ほら、腕章」

雲雀は腕章を持ってきて、机の上に置かれている学ランの上に置いた。

「うーす……。じゃあ帰る……」

オレは学ランと腕章という拷問的しつもんなモノを持って家に帰ろうとした。

「ねえ、君って何か武器持ってるの?」

「…ハイ？」

突然悪魔：もはや大魔王様がオレに聞いてきた。

「さっきの条件で『武器の所持を認めろ』って言ったでしょ。どんな武器なのかと思ってね」

あ——、あれか。

「今んここは何も。だけどコレにしようかな、ってのはあるが…。それでも？」

「うん。どんなものなの？」

「短剣。あ、ただ一刀じゃなく二刀な」

今十雅に作らせてるんだ！

もう何十回かダメ出したけど…。

「ふーん…。まあいいや」

…まあいいなら聞くなよ…！

「じゃ、オレ帰るわ。じゃーなー」

こうしてオレは応接室を後にした――。

そして次の日。

オレは遅刻確実…もう10時なのにも関わらず、ゆっくりと学校に向かって歩いていた。

……昨日ムリやり渡された学ランを着て、腕章をつけてな！！

でも普通の着方はしてないぜ？

＼シャツの中に紫色のＴシャツを着ているからな。

ガララッ。

教室のドアを開けた。

皆、静かにオレを…。いや、オレの腕章を見ていた。

——顔を真っ青にして…。

「君！！遅刻してくると……は……」

教師がオレを見て、怒鳴ったかと思いきや、震え始めた。

そうだよな…。

学ラン着て、腕章付けてたらそうなるよな…。

「何か用スか？」

オレは教師に聞いた。

「ななななな何でもないですっっっ！！！！いつ、今テストをしているのですが、どうですか？」

あ！！嫌ならいいんです！！！！」

プルプルと手を震わせながらプリントを渡してくる。

まあ、暇だし…。

中一の問題なんてオレには問題ですらねエし…。

「別にいいっスよ…」

オレはプリントを貰う

『ありがとうございます…!!』とか聞こえるが、気にしない、気にしないっ…。

オレは席に着き、プリントを見る。

理科…か…。

オレはスラスラと書き、一分弱で終わらせた。

それを教師が見ると、

「回収します!!」

と言った。

「先生!まだ10分しか経ってないのですが…」

「20分って言ってたじゃないですか」

とか、いろいろ聞こえる。

「か…風間さんが終わってしまったんだ!!一番後ろの席の人!!早くしなさい!!」

その列は後ろから二番目の人!!」

と言って指をさすのはオレの列。

オレがいるからねえ…。

先ほど文句言っていた声は一瞬で消えていた。

プリントを回収し終えた教師は

「今日は根津先生の代わりなので、説明の仕方が少々変わるかもしれませんが許してください」

と言う。

… どんだけ怯えてんだヨ。

本来なら根津の奴が理科の担当なのか…。

そーだ！テスト返却の時、根津をハメてやろう♪

でも、ヒマだな――。

…よし！

ガタッ。

オレは席を立った。

「！？風間さん！？どうかしましたか！？」

「ヒマだから応接室行きます――。そんじゃ」

オレはそのまま応接室に向かった。

教室に残された教師と生徒達は南の出て行ったドアを茫然と見ていた。
ぼうぜん

E p i s o d i o 7 大空と少し仲良くなり、イエローに会う！

「今日も遅刻♪朝ゆっくりできるってサイコーだな！」

昨日に引き続き、またも余裕で遅刻している風間南だ！

今の時間ー？

11時になるな、もうすぐ。

でも気にしない、気にしない

風紀委員として遅刻が許され、超自由人となった南はあり得ない時間でもゆつくりと、一瞬たりとも焦らずに学校に行くのでした。

応接室。

「ねえ…いくらなんでも初日からあり得ない時間で登校しないでくれる？」

「え——。いーじゃん別に……」

オレは学校に着いて、教室で授業受ける気にもならなかったので、そのまま応接室にGO！したのです。

「それに君は授業もサボってるの？今日一度でも教室に行った？」

「いんや。今学校に来たばかりだけど？」

「じゃあ君は教室で授業受けてきなよ。それとも、書類整理をやるかい？」

「！？？なにその究極の二択！！それなら教室行ってくるよ……」。

「じゃーな！」

オレは嫌々教室に行った。

「ん？すぐに書類整理をやらされなかっただけで十分か……」

ガラッ！！

「「「「「……「「「「」

お！今日は教師までも静かだ。

…アレ？なんか席順おかしくない？

「かかかかか風間さん！！あなたの席は変えてないのであそこです！！」

よろしいでしょうか！？」

「…変えてないってどういうことだ」

「ハイハイハイ！！」

実は、効率よく授業を進めるために、この時間だけ席替えをしてもらったんです！！」

「あー…わかった」

効率よく、か…ただ単にバカが後ろに来るようにしただけじゃん。

オレに席の隣は、沢田綱吉…。

確かにバカだけどさ…。

ハア…ここで原作キャラと関わるのか…？

あんま原作変えたくねエし、メンドイし…。

「よ…よろしく願います…風間さん…」

沢田がオレに話しかけてきた。

…沢田ってこんなに度胸ある奴だったんだな…。

「
…ああ…」

オレがそれだけ言っと、周りで

「おい！ツナが風間さんと話してるぞ！！」

「やっぱり最近ツナってすげーな…」

とかいろいろ言っている。

授業は――

数学か…。

オレ、どの教科でも満点取れる自信あるけど、数学は特に得意なんだぜ？

そして、オレは教科書を開いた。

沢田はきつと、『風間さんも勉強するんだ…教科書になんか書いてあるかな』とでも思ったんだろう。

沢田がオレの教科書を覗き込んできた。

「な！？何これ——！！！！！？？！？」

沢田がいきなり叫んだ。

正直言つて、ウルサ過ぎ。

ボコられたいんですか？と思う。

「……………何か用？」

オレが低い声で言い、冷たい視線をぶつけて言った。

ああ、微量だが殺気も混ぜてるぜ？

周りからは

「ツナ…殺されるんじゃないか？」

「ご愁傷様」

とか言われてる。

「え！？？あ…あの…」

とモゴモゴ言ってる聞こえない。

「ハッキリ言え」

この一言で周りがこそこそ言っていた声も一瞬で消えました。

「えっと…その教科書、オレ達のと少し違ってたって…よくわかんないことばかり書いてあるから…」

「あー、これは数学の教科書。」

ただ、トップ校に通う高校三年でようやく解けるようになる位のレベルのな」

「あ…ははは…そうなんだ…」

（もう笑うことしかできね——！！！！！！）

「まあ…でもこんなの簡単すぎてつまんねエけど。沢田解いてみるか？」

こんくらいなら沢田でも解けんじゃね？

簡単だし。

「イヤイヤイヤイヤ、いいです！！オレはどーやっ たって解けない

だろうし!!」

「あっそ」

オレはまた寝始めた。

それからオレを起こさないよう、静かに授業が再開されたらしい。

キンコーンカーンコーン。

「…昼飯…か…」

どうやら席替えタイムも終わっただけで、元通りの席になっていた。

購買で飯買つか…。

オレはそう思い、席を立とうとしたその時。

「あ、あの…！風間さん…！」

オレを沢田が呼びとめた。

「……なんだよ……」

オレは今、腹減った&寝起き、という不機嫌な状態なのによー。

喧嘩売ってんのかぁー??

「オ…オレに、勉強教えてください!!!」

頭を深く下げて頼んできた。

「…理由」

「は、はい？」

「オレに勉強教えてもらいたい、っつー理由は？」

「オレ…今家庭教師がいるんですけど、その家庭教師が答え間違えることにオレに攻撃してきて…」。

そっそれで、あんなに難しそうな問題が簡単すぎ、なんて言う風
間さんに教えてもらえないかなって思っで…」

「（そりゃあ、リボーンはイヤだろうな…）」

…よーするに、オレにその家庭教師の代わりをやれっつーことか
…。

…まあ、いーぜ…」

そっ思ったのも何となくなんだけどなー。

主人公である沢田がどんくらい頭いいのか…それを知りたかっただ
けだからな。

オレが言っつと、沢田は顔を上げた。

「ほ、本当ですか！？」

ありがとっございま「ただし、一回だけな」…そっそれでもいい
です！

ありがとうございます!!」

沢田はまたオレに頭を下げた。

——ここでまたメンドイことになる…。

「「「「風間さん!! 私^{オレ}にも教えてください!!」「「「「

クラスのほぼ全員が言ってきた。

「…イヤだ。オレは一人だけにする。一番最初に言ってきた沢田のみだ。」

他の奴に教える気はない」

皆、嫉妬してるよ。

ドンマイ!

「沢田ー、今日の放課後オマエん家行くからな。場所は雲雀に聞くから。」

んじゃーな」

オレはもう授業を受ける気が完璧に失せたので、カバンを持って応接室に行った。

もちろん、購買に寄ってからな」

放課後。

オレは約束通り沢田の家に来た。

…まあ、時間がもう遅いけど…日が見えず、暗くなってるな…。

家の場所は雲雀に聞いて借りを作りたくなかったから校長に聞いた。

…答えるの、早かった…。

腕章見たとたん、敬語使いまくりだった…。

ピンポン。

「おじゃましまーす」

インターフォン鳴らして、すぐ！？と思ったヤツもいるだろう。

ま、オレは教えてやる立場だからいいんだよ。

「あら？どなた？」

エプロンを付けた女の人が出てきた。

「風間南といいます。沢田…沢田綱吉に勉強教えに来たんですけど…」

「あら！カッコいい男の子ね！ツナのお友達！？「友達では無いです」」

「?そうなの?」

つつか沢田の母親にも男だと思われるって…。

そんなに男っぽいか?オレ…。

「はい、そうです。んで沢田綱吉はいますか?」

「ちょっと待ってね。ツナー!!お客さんよー!!」

階段の上に向かって叫ぶ。

「あ、うん!!」

ドダダダダ、と階段を下りてくる。

「風間さん！！来てくれてありがとうございます！！」

沢田の私服…。

超フツーだな。

ってか服に『27』って書いてあるし…。

そんなに自分の名前好きなんだ…。

マグロなのに…。

「べつに。んで、なんの教科？」

「えっと…ほんとに全部教えてもらいたいんですけど、数学…で」

「数学な…じゃあ早く終わらせるぞ」

靴を脱ぎ、階段を上る。

部屋も至って普通だな。

床に座って、一枚のプリントを渡す。

すると沢田は一瞬で真っ青な顔になった。

「あ…あのー。これをやるんですか…？」

「何言ってるんだ。当然だろ？」

「…少ししかわかんないんですが…」

「それなら分かる問題だけでも解け。全くわかんないような問題も少し考えてみる」

「（この人、下手したらリボンよりもスパルタだ——！！）

は、ハイ……」

「じゃあスタート」

こうして、オレと沢田のお勉強会が開催しましたとさ。

それから数分。

「も、もう分かんないです……」

「見してみる………一問もできてない……バカにもほど
があんだろ……」

そう、一問もできてなかった。

簡単なのになー。

ちよつと高校で習う公式を使えばすぐ答え出るのに。

「…これって何年生対象の問題ですか？」

「並中生なら…高校二年？」

「そ、そんなのオレが解けるわけないじゃないですか…!!」

「黙れ」

オレの一言で静まった。

ほんとにコイツは騒がしい…。

ガチャ。

扉が開いて、誰かが入ってきた。

「ちゃおっす」

リボーンだ。

「リ、リボーン！！入ってきちゃダメだって言ったじゃないか！」

「うるせーぞ、ツナ。…で、オマエは誰だ？」

オレの方を見て聞いてきた。

「人の名を知りたいのなら、まず自分が名乗りな」

「……オレはリボーンだ」

「リボーン、ね。オレは風間南。最近沢田のクラスに転校してきた一般人だ」

「やっぱりオマエが風間か…。だが一般人なわけねーだろ」

はい？オレが一般人じゃないだと？

そんなことは無い。

オレは一般人だ。

でも反論するのも面倒だから、まあいつか。

つつかオレのこと知ってんなら聞いてくんじゃねーよ。

「そー思いたいなら思っとけ。で、何の用だ」

「特に用はねーぞ」

「リボン!!早く戻ってくれよ!」

「おめーは黙っとけ」

「んな!!」

…このガキ…殺気放ってやがるな…。

警戒してんのか…。

まあ無理はないだろうけどさ。

第一オレも少し殺気放ってるしー。

お互い様ってことで♪

「…なあ沢田」

「は、はい…!?!」

「オレもつめんどくさくなってきたから帰るな」

「え…あ、はい…あ、ありがとうございました…」

「チビちゃんもじゃーな」

オレがリボン^{チビちゃん}に言うと、さらに大きな殺気を放ってきやがった。

「…ムカつくガキだ。」

「チビちゃん、なんて呼ぶんじゃないねえ」

「呼び方一つで文句言っな。チビちゃん」

「チツ……」

舌打ちとかムカつくー。

オレはそのまま沢田家を後にした。

「リ、リボーン……？」

南がいなくなった沢田の部屋では、リボーンが難しそうな顔をして

いた。

「アイツ…何者なんだ…？」

「な、何者って…？」

「アイツはオレが最初この部屋に入ってきた時からずっと、殺気を放っていやがったんだ。

オレが放ってた殺気にも動じない…。

おまけにこないだ学校帰りをつけたが、気配が突然消えて見失っちゃった。

このオレを撒いたんだ…ただモンじゃねえ…」

「おい！！何やってるんだよ！！風間さんを尾行するなんて…」

リボーンの暴露話に鋭くツツコミを入れる沢田。

「…何より、アイツのことを調べてもなかなかヒットしねえ…情報

が無^ねえんだ…。ボンゴレの力を以^{もつ}てしても…な」

「??それって戸籍^{こせき}が無いってこと?」

「いや、そうじゃねえ…あるにはあるが、情報が少なすぎるんだ…」

「……どういうこと?」

沢田の質問にしばらく考えるリボーン。

「(ツナに言って、風間に警戒心を持たれても困るしな…)」

何でもねえぞ。今の話は忘れとけ」

「じゃあ最初っから話すなよ!!」

「それはともかく、そろそろ飯の時間だぞ」

リボーンは部屋を出て、階段を降り出した。

沢田は疑問を残したまま、ご飯を食べたのであった。

Episode 8 大空VS嵐！

「あーあ、昨日は沢田のせいで疲れた——」

ハア、とため息を吐きながら南は登校していた。

時刻は9時。

普通は遅いと思うが、南にとっては早い時間。

昨日、雲雀から連絡があったからだ。

1 - Aに転入生が来る、と。

ちなみに二人来るらしい。

南は原作知識で知っている中で、獄寺が転校してくることを知っている。

その転入生が獄寺だと思い、学校に早く行くことにしたのだ。

もう一人が誰なのかは知らないが…。

ガラッ。

「おはようございますっ！風間さん！

今日は1時間目はHRで、転校生の紹介をしていました！」

やはり、キビキビと南に説明する教師。

「（来たか…）転校生？」

「はい、獄寺！山下！風間さんに自己紹介しろ！」

南は教師が言った『山下』という人物に驚く。

「じ、獄寺君！早く自己紹介をしなさい！」

教師は『南の気分をこれ以上悪くさせてたまるか！』と思って獄寺に言う。

「あー、オレもメンドイんでいーや。後で雲雀に聞くな」

獄寺は絶対自己紹介なんてしないから時間のムダだということを南はわかっていた。

それよりも、山下という女が存在が気になった。

原作にいなかった人物がいる、このことを説明する方法が一つしか見当たらなかった。

南と同じ『転生者』である。

とりあえず十雅とお話することにして、南は席に座った。

あれから、オレは十雅に会いに行き、聞いた。

「お、南！」

「十雅…あの女は何だ」

「あ…あの女？」

十雅も知らないのか…？

「オレのクラス…1 - Aに転入してきた奴だ。獄寺と一緒に…」

「んー？獄寺と一緒に転入してくる奴なんていねーぞ？」

「だから聞いてんだろ…」

「あ、そっか」

「やっぱりコイツ馬鹿だな…」。

十雅はどこからか資料を取り出した。

「んー、やっぱりそんな奴はいねーな…。転生者かもしんねえと思う
たが…記録がない」

パラパラと資料を見ながら話す。

「記録？」

「ああ。転生させたら記録をつけるんだ。これも仕事だからな。」

ま、転生させるのは間違えて殺した時だけだからあんま使わないけど…。

南の前にも転生させた奴いるんだぜ？同じリボーンの世界にな」

「へー…。いつ頃？」

「それは教えられない。ま、その内分かるさ」

その内……？

ま、いつか…。

「で、その女の名前は何ていうんだ？」

十雅は資料を閉じ、聞いてきた。

「えっと…名字は『山下』。名前は忘れた…つか知らね」

「『山下』、ね…。とりあえず調べてみる」

「おう、なるべく早くな」

南がそう言つと、十雅は何かを思い出したように「あ」と言った。

「何？」

「あのよ…前に小型ノートパソコン…言いくいから『パソコン』でいつか。ともかくそれ送っただろ？」

あれに特殊能力つけんの忘れてて、今は単なるパソコンなんだけど…」

「…能力ってオマエが考えてつけるのか？」

「ん？まあそうだな…」

それを聞いて、南はあることを思いついた。

「んじゃ、オレが能力考える」

「あ、いいぜ……………ってダメ！！これはオレが考えるものなんだからよ！」

「男に二言は？」

「無い！！……………じゃなくてえええええ！！！！！！」

「よし、じゃあオレが考えるから。だから今はまだ何もつけないでおけよ。じゃーなー」

南は勝手に狭間から現実世界に戻り、そこには自分の発言を後悔する十雅のみが残された。

そして、今いるのは屋上――。

「オレを裏切るのか？リボーン！！今までののは全部ウソだったのかよ！！？」

「ちがうぞ。戦えって言ってたんだ」

「は！？」

南は獄寺と沢田の戦いを見るために屋上に来ていた。

なぜ南が戦いのことを知っていたか。

それは戦い後の獄寺の変化っぷりが面白かったから覚えていたのだ。

「あー早く死ぬ気になんないと死んじゃうぞー」

そう思っている間にも、獄寺から沢田への一方的な戦いが続く。

「^{リ・ボン}復活！……死ぬ気で消火活動！……」

バカ、と音を出して沢田の死ぬ気タイムが始まる。

「そーいや死ぬ気見るの初めてだったな……」

南は屋上でボソッと呟いた。

「消す消す消す消す消す……」

沢田の手がダイナマイトの火を消していく。

獄寺は『二倍ボム』を放つが沢田はどんどん火を消す。

そして、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成なために手から一つダイナマイトが落ちる。

こういう場合、一つ落ちるとバランスが崩れるのでダイナマイトはポロポロと落ちていく。

「（ジ・エンド・オブ・俺…）」

獄寺がそう思った途端…。

「消す！…！」

『消火活動』を目的として死ぬ気になった沢田は獄寺の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

「…おー、すごいなー……………それ以上にキモイけど。」

で、何でオマエがそこにいるんだ……………？本来存在しないはずの、イレギュラーさんよお……………」

南がそう呟いた。

南が大っ嫌いの、本来存在しない転校生————山下咲。

彼女が沢田やりボン達と一緒にいたのだ。

ならば原作と少し変わって進むのではないか…？

そう思って南はかなりイラついていた。

しかし、原作通りに物語は進む――。

獄寺が沢田に土下座する。

しかし、この後が変わった。

「ところで、10代目。この女は誰ですか？さっきから一緒にいますか……」

「……チッ。ここからあの女が関わるのかよ……獄寺、気づかなくてよかったのに……」

南の予想は、当たってしまった。

「あ、この子は山下咲ちゃん……です。今日獄寺君と一緒に転校してきました……」

なぜか敬語になる沢田。

「山下、オマエは10代目の何だ！…さっきから馴れ馴れしく10代目の傍そばにいやがって！…」

「（ナイス獄寺あああああ！…！！！！！！ウザいよな！超ナイス！！！！！！！！！！）」

南は心の中で獄寺を後押しした。

「えっと…ツナの友達…です。今日なっただばかりだけど…」

咲がビクビクしながら言う。

そして、それだけではない。

顔が真っ赤に染まっていた。

「アイツ、転生者っつーことは原作のことも知ってたんだよ…。な
ら何で怯えてるんだか。」

そんなもってあの顔は何だ。醜^{みにく}い顔に拍車^{はくしゃ}が掛かってんぞ」

南は離れていてあまり分らないが、獄寺は咲にかなりの殺氣を送
っているのだ。

知っていても、まさか会ってすぐに殺氣をぶつけられて怯えない人
は一般人にはいないだろう。

そして咲は獄寺のことが好きなのだ。

教室でもチラチラ獄寺を見ていた。

「ケッ」

獄寺は咲の存在を自分の中から消した。

そして原作に戻って、不良達が来て、獄寺がダイナマイトでボコボコにした。

「あー、よかった。原作のことを覚えちゃいないが、アイツが獄寺から嫌われて。

どっちかつーとラッキーだったからいや」

少し上機嫌になった南はiPod touchで曲を聴きながら家へと帰った。

Episode 9 教師をハメる！

昨日、明日は理科のテストの返却があると聞いた。

つまり、根津をハメる日だ！

そして…。

今日は、学ランも腕章も付けてないんだぜ！！

…でも、今日はなんだよな…。

今日からじゃないんだよな…。

なんで付けてないのかって？

フッフッフ…。

これこそがあの忌まわしき根津をハメる方法だ！

だから昨日頑張って雲雀から許可を得たんだよ…。

アイツ、人の言ってることムシしやがるから大変だったんだぜ？

昨日にさかのぼってみよう――。

「なあ、明日だけでもいいから一般の生徒と同じ制服で来て」「ダメ」

…聞きました!?

この即答っぷり!!!!!!

「なんでそんなに即答なんだよ!?!」

「君は風紀委員でしょ。なら当然だよ」

「だーからー、一日だけ!!明日だけでいいから!?!」

頼むよ、極悪非道の風紀委員長雲雀様」

「咬み殺してあげようか？」

死にたくはないけど、明日の普通の制服はなんとしてももぎ取る！
！！！！

「あ、それは丁重にお断り。ホントに頼むって！！」

「……」(ムシ)

「はあああああああ！！！！？？！！？？！！

ここにきてムシとかなんだよ！！！！」

「……」(ムシ)

「………ちょ、ちょっと酷くね？」

「………」(ムシ)

「そーかよ！！ムシかよ！！ならオレはここで頼み続けるだけだ！！！」

なあ！！明日……」

と、二・三時間続き雲雀が折れたのだ。

……オマケに大量の書類（今日来る分だけらしいから大量かは分からないけど、きっと大量）も。

よし、逃げよ♪

今思ったけどオレって、一回も風紀委員の仕事してないなー（逃走するから）。

肩書きだけでいいって。

風紀委員とか、『風紀』って掲げただけの不良の集団なだけなんだよな〜。

原作では一部しかその様子が書かれてなかったから違うと思うだろうけどな。

おっと、これを雲雀に言うってことは喧嘩売ると同じことだから言わねえけど。

ま、そーゆーワケで今日のオレは風紀委員と知らないヤツは一般生徒だと思っだろう。

根津とか根津とか根津とか。

あー、根津の驚いた顔が目には浮かぶぜ♪

楽しみだな♪

そして、理科の時間――。

「今日は理科のテストを返却する。呼ばれたヤツは取りに來い。」

まず、青山―

そして、名前順で呼んでいく。

オレは風間だから、沢田より前か―。

「大久保―」

「はい」

「風間―」

「……」

「風間！早く取りに來い！！」

ムシしてる訳ではありません。

爆睡中です。

周りの生徒（風紀委員と知っている生徒）は

「根津のヤツ、風間さんの機嫌を悪くさせんなよ！」

「根津…さようなら」

…とまあ、オレが根津をボコと思っているようだ。

オレとしてはまだ考え中だな。

「風間あ！！起きんか！！」

そう言いながら根津は教科書を丸めたもので殴ろうとする。

オレは爆睡中だったが、気配を感じて起きた。

ヒュッ。

パシッ。

なにが起きたかと言うと、根津が思いっきり殴ろうとしてきた（ヒュッ）。

そこでオレの右手だけが動いてそれを止めた（パシッ）。

んまあ、こんな感じ？

「貴様っ！！」

「ウルセエ。黙りな」

根津のやつ、どんどん顔が真っ赤になってくぞ？

あー、楽しい

「生徒ごときが生意気なんだ！！」

…そうだ、オマエのテストの点数を皆の前で言いふらしてやろう。

えーっと…100点だ！！

たかが100で…なにいい！！！？！？！ま、満点？？！？
？！！！」

「まあ、簡単過ぎて一瞬で終わったしー？

オレを誰だと思ってるの？」

「ぐっ…まあいい。そうだ、ここで仮定を話してやる。

理科のテストで満点を取りながらも返却時は寝てるやつがいると
しよつ。

そいつは間違いなく頭のいいやつのテストをカンニングしている！

それはなぜか！！なぜなら…。

そいつは頭がいいように思わせたいからだあ！！！！！！」

「『『『『（バカじゃないのか？根津のやつ…。風間さんはホントに頭いいんだよ）』『』『』」

クラス中があり得ないほど静かになり、皆の心の声と一緒にあった。

「そー思いたいなら思っとけ。五流大卒の根津銅八郎」

「！！！？なぜ…まあいい。後で聞いてやる。」

「続きだ！川田」

「お？案外動揺しなかったな？」

「まあここでリアクションしちまうと退職すつからな…。」

ああ、オレが根津の学歴を知ってるのは調べたからだ。

転入二日目で根津と会った時にかなりムカついたからさ」
♪

後はこっそり雲雀にバレないように調べたんだ！

雲雀にバレたら根津をハメられないじゃん？

あ！そうだ！！こいつムカつくから退職させよ」
♪

そんな真っ黒いことを考えている内に話は進んでいき、沢田が呼ばれ、仮定をし、獄寺が来て…。

今は校長室。

校長はオレが風紀委員と知っている。

「根津君、まずは風間さんを帰らしていいかね？」

「校長！！いけません！！風間が一番悪い生徒なんです！！」

「ききききき君は雲雀君を敵に回したいのか！？」

「何を言ってるんですか校長。そんなのは嫌に決まっていますですよ」

「風間さんは風紀委員だ……!!」

「……!!???!?!?!」

あービビってる、ビビってる」

「は！そついえば！・Aに風紀委員がいるとか…。

風間さん……!! ゆゆゆゆゆ許してください……!!」

お——、見事なド・ゲ・ザ」

でもな、オレってばさっきのかなり頭に来てんだ」

「しょうがないですね」。

実は根津が五流大卒で、40年前に並中に通ってたってことを教

えるだけでカンベンしてやるよ」

「!?! 風間さん! それは本当のことなんですか!?!」

おっ、いーねーいーねー♪

校長が食いついてきた。

「まー後は本人に聞いてくださいーい。

そんじゃ」

オレは校長室を出て行った。

後から聞いたことだが、あの後は根津が退職することになり、沢田と獄寺も何事もなく助かったそうだ。

そんでもって、オレは見事に書類からの逃走を成功させました♪

E p i s o d i o 1 0 ファミリーに勧誘される！

あっという間に7月…もうすぐ夏休みだ。

今日は…6日。

そうそう、いつの間にか沢田と山本が仲良くなってたんだぜ！

何があったんだろーな！。オレこの辺の話覚えてねーんだよ…。

ま、別にいつか。

……別によくないのは、今の状況だ。

場所？並中。

まあこれは問題ない。

一緒にいる人？

…これが問題ある。

沢田、リボーン^{チビちゃん}、獄寺、山本、あの女。

原作でもし、こんなシーンがあつたのならば許そつ。

だがな、なぜあの女がいるんだ。

全く……。

「おい、チビちゃん。オレを呼んだ理由はなんだ」

「オマエ、ファミリーに入れ」

……はい？

「聞こえてなかったのか？ボンゴレファミリーに勧誘してるってことだぞ」

「断る」

「…なぜだ」

あのさ…まず一般人に『マフィアにさせてあげる』と言って喜ぶ人がいるとでも？

このリボーンチビちゃんは常識が無いのかな？

「オレはマフィアになるつもりねーし。第一束縛されたり制限されるの嫌いだし？」

オレは自由がいいからなー」

「安心しろ。ボンゴレは束縛なんかされねー自由なマフィアだぞ」

…オレが言いたいこと伝わってねーし…。

「…そうだとっても断る。理由はねーがな」

「……そうか。わかったぞ。だが気分が変わればいつでも入れてやるぞ」

あり？ 案外モノ分かりがいいな。

予想ではこの後もしつこく誘ってくると思ってたのに。

…ま、いつか。

「おい風間。リボンさんの勧誘を断るたあどーゆーことだ」

……この声、数回しか聞いたことないから無視でいっかなー。

でもなー、コイツとは気が合うと思うんだよなー。

あの女のこと嫌いなの一緒だし？

だから一応返事しとくか。

「別にいいじゃねーか、オレの自由で」

「良かねーよ！内容も内容だ！ボンゴレに入るのを断るだど？ナメてんじゃねー」

「いや別に…ナメてなんかねーし……」

コイツ、話通じねー……。

「まーまー獄寺落ち着けて」

「テメエは黙っとけ野球バカ！風間！！リボンさんが勧誘してくださってんだから入りやがれ！」

「だから、嫌だっつの……」

しつこいなー。

だがここで、救いなのか逆なのか、一つの放送が入った。

『風間南さん、至急応接室に来てください。委員長がお待ちです』

…草壁さん……。

…ま、仕方ない…行くか。

「つーわけでオレ行くわ。んじゃな」

「テメっ！おい！」

獄寺が叫んでる気がするが、気のせいだろう。

でもなー、この後応接室行くのも嫌だなー。

帰る…と雲雀が家まで咬み殺しに来そうだからなー。

……しゃーねえ、行くか。

渋々応接室に向かった。

ガラッ。

「んで、何の用？」

開けながら、室内にいるであろう雲雀に聞いた。

「いい加減、仕事をしてもらおうと思ってね」

「…………お疲れ様でしたー」

回れ右！さあ帰ろう！！

ヒュッ。

「逃がさないよ」

……いや、トンファーで頭殴ろうとするなよ……。

ギリギリで避けたからいいものの、当たってたら……。

「おい、当たってたら頭割れるだろ！」

「君なら避けると思ったからね」

「……なんつーテキトーな根拠……」

「……その言葉、君にだけは言われたくないな」

「何それ、ヒドくね？ま、傷付かないけど」

ああ、こう会話してる最中もトンファーで攻撃しようとしてきてる

んだぜ？

風紀乱してる委員長だよな、こりゃ。

「…で、仕事するの？」

突然攻撃を止めて聞いてきた。

「いや、しねえ」

何の悪びれもなく返事をしたからかなあ？

またトンファーが来たんだよね。

「…やっぱり君は、咬み殺す…！」

ビュッ。

「のわっ！危ねーなあ！」

仕方ねえ、逃げるか。

「逃がさないよ」

わー、追いかけてきた…。

校舎だと階段疲れるから…。

よし、外行こう！

ドタドタと階段を降り、あっという間にグラウンド。

…あれ？何だろう…。

ドガアン、って大きな爆発…。

あ、誰か見える。

獄寺、チジちゃんリボーン、階段のところに……10年後のランボ？

あ、爆煙の中からも出てきた。

沢田に、山本……それにあの女が。

あー、嫌なモン見ちまったー。

「見つけたよ」

……。

そろそろと、後ろを見る。

「あは、ははは……？……やあ、こんにちは」

「君に選ばせてあげるよ。このまま素直に仕事するか、僕に咬み殺されるか」

「なんじゃそら……。あ、じゃあさ、こないだ根津銅八郎の学歴詐さし称ようを見抜いたからそれでチャラで！」

いやあ、あのことが役立つとはな〜。

オレがそう思っていると、雲雀が大きいため息を吐いた。

「…何だよ」

「仕方ないね…今日は許してあげるよ」「やった!」でも、明日は仕事あるからね」

……。

ん?何か聞こえた?

オレには聞こえなかったなあ。

「そんじゃな!」

オレはもう何も言われたくないから校門までダッシュした。

「ハア…どうせ明日も来ないだろうから、放送しないかね…」

南の自由っぷりに疲れた雲雀は、足早に応接室に戻った。

今、オレは飛行機に乗っている。

理由？

十雅からさ、パスポートとか貰ったから。

で、せっかくならイタリアがいいなー、って。

ん？それだけだけど？

オレは思ったことはすぐ実行するからな。

ああ、今日は平日だから学校あるぜ？サボってるけど。

でさ、イタリア行って、どこ行くっ…。

ピザの斜塔でも見に行くか？

…いや、冗談。

ボンゴレファミリー本部？

いやいや、もっと有り得ない。

……よし、決めた！

行き当たりばったり！！

おお、こんなことを決めてる間に到着だ。

さて、どこに着くかね…。

「で、早速迷子だ……」

ここ？どっか分からない森の中。

イタリア語読めるんだけどさー、道は知らないんだよ。

人が多いの嫌いだから人避けてたら…。

森でした、みたいな。

人嫌いとか…雲雀に感染させられたな。群嫌い。

「…とりあえず、だ。来た道を戻れば………どっちから来たっけ？」

マズい、これは迷子ではなく、遭難……！？

携帯……『圏外』、ね。予想はしてたよ。

「とりあえず、行き当たりばったりって決めたんだから続けよ」

そしてまたもや道無き道を進む。

1時間ほど歩いただろうか。

視界に大きな建物が入った。

…よし、とりあえず入ろう…。

さすがに疲れてきた…。

ずっと同じ景色って意外とキツいな…。

頑張って走るか…。

走ると意外と近く、すぐに着いた。

でも見張りがいるなあ…。

「Ciao…」

疲れきった声で挨拶…。

「!？」

「あ、驚かせたなら悪い…。って日本語で言ってるけど通じてる?。」

「…日本人か」

あー良かった…。

イタリア語でもいいんだけどさ、最近使っていないから自信無いし。

「ああ…。空港出て、テキトーに歩いてたらここに着いて…。できれば入らせてもらえね？つかここどこ？」

「…ここは一般人が来るような場所では無い」

「つつと、マフィア？」

「…!!？」

そんなに反応しちゃダメだろ…。

「あ、オレはどっかのファミリーとかじゃなく、普通の奴だから…」

「……ここはボンゴレ独立暗殺部隊、ヴァリアーだ」

…時が止まったとは、正しく今の状況だろう。

確かに、建物にV A R I Aらしき旗はあった。

それでも来たのがいけないのか？

…最悪だ……。

「おい、どうした？」

「いや、何でも…。やっぱり帰るわ」

「待て。今から引き返すことはできない。こここの情報を得たのならば他のファミリーにバラす危険性があるからな」

…なら話すな、と思うのはオレだけ…？

「しししっ。誰そいつ」

「「！」「」」

突然中から人が出てきた…。

……でもな、見たことある顔。

「べ、ベルフェゴール様！」

そう、プリンス・ザ・リッパ切り裂き王子の異名を持つ、ベルフェゴールだ。

「で、オマエ誰だよ」

「あ、オレは日本人の風間南つつーんだけど……。道に迷ってここに
来て……。できれば中に入れてくんね？ 腹減って喉渴いた……」

「迷子かよ……ま、いーぜ。入んな」

もう逃げるのは諦めた。

だってさ、逃げたら殺されそうじゃん？

今にナイフを投げてきそうだし。

「なあ、オマエ戦闘とかできる？」

「戦闘つか暗殺部隊なら殺し合いだろ？」

「オレらはそーだけど、オマエは一般人だろ？あ、それとも殺し合いしたい？」

「アホ。オレはそんなことお断りだ」

オレとベルが普通に会話していることに周りにいる奴らが驚いてる

な！。

別に気にしないけど。

「つてことは一応強いんだ？」

「さあなー。よく知らん」

「なんだそれ」

こんなことを言っていると、他の者が出てきた。

「うゝおゝ おい！！誰だそいつはあ！！」

「ウルセエ！」

ボカツ。

……しまった……。

出てきたロン毛のウルサイ奴を殴っちゃった……。

「あ……オレの鼓膜を守るための正当防衛だからな！」

「言い訳になってねえよ」

違うぞベル！

これは言い訳では無いからな！

「デメエ…ぶつ殺されてーか!？」

「だからさ、ウルサイんだけど?。」

もうこーなりやヤケだー!!

鯨だろうが何だろうがかかってきやがれ!

「…で、ベル。コイツは誰だ」

「風間南つー迷子。日本人だよ」

迷子って…。

「迷子…?」

「迷子って言われ方は嫌だけど…。それで腹減ったから何か貰おう
と思ってさ」

オレが付け加えると、納得したようだ。

「でさ、オマエらの名前は?」

そつえば聞いてなかったからな。

オレは知ってるけど、名乗られて無いのに知ってたらおかしいし。

「オレはベルフェゴール。ベルって呼べよ」

「オレはスクアーロだあゝ」

「ん、よろしくな。ベルにスクアーロ。つつかさ、食堂みたいな場所ってまだ？」

「すぐそこだぜ」

ベルが指した場所には大きな扉。

いい加減に腹がヤバいから勢いよく扉を開け、叫んだ。

「何か飯くれ！！」

…うん、中にいた人たち固まってるよ。

「あ、その変な頭の人、何か飯くれ」

頭のとっぺんからだけ緑色の毛が生えてる。ダサ。

「いきなり現れて何言ってるのよ！」

「うわ…しかもオネエ言葉とか…生きる価値無いな」

「黙りなさい！」

あー、コイツいじめるの楽し♪

「うしし♪ルッスーリア、何か作ってやれよ」

「そーそー。ベルの言う通りだぜ？早く作れよ」

「命令になってるわよ!？」

「早く」

「キィー——！！わかったわよ！」

やべー、おもしろ。

「何でもいいわね！？」

「だから何でもいっつつってるだろ」

「ホントにムカつく坊やね…」

「あ、オレ一応女だぜ？」

「「「は？」「」」

…ワオ、三人の声が重なったよ。

ベルとスクアーク、それと多分ルツスーリア。

「あ、男だと思ってた？」

「…冗談…じゃねえんだよな…」

「うゝおゝい………」

「まさか…私と同類？」

「バカ！ちげーよ！！」

オレがルツスーリアと同類だと？

ナメたこと言うな。

「でさーオマエの名は？」

「私はルツスーリアよん。ルツス姐って「断る」」

誰がルツス姐だなんて呼ぶか。

「それよかまだ？ルツス」

「…姐はダメなのね……。できたわよ、チャーハン」

まだ熱そーだな…。

でも腹減ったから食お。

「いただきー」

ムシャムシャという効果音が出そうな勢いで食べる。

「ん！ふわいほ！」

「いや、何つつてるか分からねーから……」

む。ベルは読解力に欠けるな。

仕方ないなあ。

ゴクリ、と飲み込んで再び口を開く。

「うまいな」

「あんらー。嬉しいこと言ってくれるじゃない！えっと……名前は？」

「ベルに聞け」

「……風間南、だよ」

ベル、名前を言うくらいで疲れた表情するなよ。

「ありがとね、南ちゃん「シネ」な！？」

ルッスが言った時、オレは殺気を込めて言い返した。

「「「!!!」」」

その殺気に気づき、三人はオレから距離を取る。

…まあ、普通に警戒するよな、うん。

「デメエ…やはりどつかのファミリーか!!」

「あースクアール、違う違う。オレは名前にちゃん付けされたのが嫌だっただけだ」

「……は？」

いや、三人して同じ顔しなくても…。

ボタン！

「今の殺気は何だい？」

あ、赤ん坊だー。

マーモンか。

「…そこにいる南ちゃ「あゝあゝ？」…南の殺気よ。でも敵意は無いから大丈夫よ…」

「南…？君のことかい？」

オレの方を向いて聞いてくる。

「そーだぜー？あ、皆もオレのことは呼び捨てでいいからなー」

そう言つてチャーハンを食べるのを再開する。

「「「「（何て自分勝手な奴……）」「「「」

んー、やっぱりウマイー！

「そんじゃ、じつそん」

「で、南はいつまでここにいいのかい？」

ああ、もうマーモンとも名前とか、ここに理由とか話したぜ。

「んー、じゃあ帰ろっかなー。明日もサボると雲雀アイツうるさそーだしなー。そーいえばさ、ここのボスって誰？」

その言葉に、皆がビクリ、と反応する。

…あり？XANXUSって何かワケアリだっけ…？

んー…リング戦の最後、読み忘れたんだよな！。

ちくしょう…。読んどけばよかった…。

「ボスは……………」

あ。なんかシリアス…。

「やっぱ別に話さなくていいや！そろそろ帰らないと日本に着くの遅くなるし…」

つつかさ、今思ったけどレヴィは？

いや別に会いたくないけど…。

「ししっ。それなら空港行く?」

「ん、そーする。…道教えてくんね?」

「道を教えるより送っていく方が早いと、僕は思うよ」

「マーモン…送ってくれんのか?」

「金取るけどね」

「…金大好きなんだな、うん。」

「そこはセルフサービスでよろしく」

「それなら断「よし行こう、さあ行こう!」……ハア。一回だけだからね」

うし!勝った!

と、まあこんな感じで空港まで送ってもらった。

…リムジンでな。

もう注目されるどころじゃなかったよ…。

V A R I A の皆もオレが荷物無いのに飛行機乗るのに驚く…っつか
呆れてたし。

別によくね？

ムツツリ…はいいとして暴君様には会いたかったな！。

ま、仕方ないか。

日本に戻ったから見事に疲れて、次の日もサボったら雲雀に怒られた。

風紀委員に入る時に許可得たのに…。

まあ、雲雀に何を言われようとオレは気にしないけどな。

Episodio 11 嵐と友達になる！

イタリアから帰国し、1日が過ぎた。

今日は休日だー♪

…雲雀から呼び出しされてるけど、オレが行くと思うか？

もちろん、行きませーん♪

今日は商店街とかで放浪^{ほうろう}するって決めてんだ！

っーわけで、今は商店街。

商店街には色んな店があるが、オレの行きつけの店になってるアクセサリーショップがある。

女物から男物まである、結構いい感じの店だ。

オレはここでリング、ペンダント、ピアスを買ったことがある。

もちろん男物だが…。

今日は新商品が入荷した、と連絡があったから来た。

ああ、店長に連絡先教えてんだよ。

最初はオレのことを怖がっていたが、今では良い舎弟しやていのような存在だ。

ん？それじゃダメか？

大丈夫、オレには何の問題も無いから。

「いらっしゃいませ」と、風間さんでしたか。早速いらしていただき、誠にありがとうございます」

「よ、店長。で新商品ってどれだ？」

「こちらでございます」

持ってきたのは、ブレスレット。

黒い紐のような物が何重かになっているものだ。

うん、なかなかいいな。

「いかがでしょうか？」

「デザインは気に入った。値段は？」

「新商品のため、あまり割引はできなかったのですが…。今は1000円をギリギリ切れるくらいですね」

1000円か…。

うん、決めた。

「いいぜ、買う。他に新商品あるか？」

「ええ。只今他のお客様がご覧になっていると思いますが……」

「ソイツ、どこにいる？」

「先ほどまではこちらに……」

そう言われて案内される。

この店、意外と広いんだよな。

それにしても、このオレよりも先に新商品を見るとは……。

気に入らない奴ならぶっ飛ばしてやる。

「あちらのお客様です」

「……アイツ？」

「？はい、そうですが……」

…確かに、アイツはアクセサリー好きだった気がするけどよ…。

まさかここで遭遇するとはな。

近づき、声を掛ける。

「よ、獄寺」

「!？」

バツ、と振り返ってこちらを見る。

「か、風間！何でこんな場所にいやがる！」

「いや、それはオレの自由だろ…。しかもオレはここの常連だし？」

「チツ…」

コイツ…舌打ちしやがった。

「何で最近…前からだけど、ここ毎日サボってたんだよ」

「ん？イタリア行ってた。日帰りだから手ぶらでな」

「は！？イタリアに手ぶらで日帰り！？…何しに行ったんだよ…」

「暇つぶし」

「……………」

何か変なこと言ったか？

よくあるだろ、こんなこと。

「…まったく…オマエのような奴がリボンさんの勧誘断って何やってんのかと思えば…」

「別にオレの自由だろ？それにしてもオマエ、なんか沢田に似てきたな。色んな意味で」

「オレが10代目に？」

あー、そーいやコイツ、沢田第一主義者だったな。

なんか面白いし、アイツ嫌いなもの同じだから仲良くなっとくか。

「そりゃなー、ずっと隣にいたりあ似てくんだろ。右腕なら隣にいるの当然だろうし？」

「右腕…オマエはオレが10代目の右腕に相応ふさわしいと思うか！」

「だってよー、山本は違うだろ？あの女はウザイからそこで論外。そうすると獄寺が残るしな」

あ…これってつまり、残り者ってことになるな…。

ま、気分が良い今の獄寺は気づかないだろ。

「オマエ…よく分かってんじゃねーか！」

ほらな、やっぱり。

頭脳は良い方だと思うのに、アホなんだよ、コイツ。

「…なんか嬉しそーだな…」

「オレは10代目の右腕として一生10代目に仕えると、今改めて決心した！」

…あつそ。

なんかコイツと会話すんのメンドくなってきた。帰ろ。

「店長ー、さっきのやつだけくれ」

そう言いながら1000円札を渡す。

「はい、こちらでございますね。ありがとうございます。お釣りの方が…」

「あ、釣りはいらん。小銭邪魔だし」

小銭って邪魔じゃね？

最近いつも思っただけどさ。

「では募金箱の方に入れさせていただきます。こちらお品物になります」

「ん。あ、獄寺。アドレス教えてくれよ」

「ああ」

ピピツ、と赤外線通信をする。

「あー、オレのことは呼び捨てでいつから」

「んじゃあオレも隼人でいいぜ」

「んー、わかった。そんじやな、隼人」

そして店を出た。

この世界に来て、友達が二人…ん？雲雀もか…？

…雲雀も含めたらこれで三人目。

…前世より多いな。

なんか久しぶりに風と遊びたくなってきたな…。

もうすぐ夏休みだし、誘ってみるか。

そう思いながら家に帰った。

Episodio 12 問7を解く！

あっという間に夏休み！

…なのに、今は学校…それも応接室にいる…。

ハア…まあ朝早くはないから少しはマシだな…。少しは。

「ねえ、聞いてる？」

雲雀^{コイツ}にしては、だがな。

「見回りだろー？ヤ・ダー！」

ギロリ。

うわお！

雲雀サンが睨みつけてきたよ！

「咬み殺されたい？」

「結構です」

「やっぱり君は人をイラつかせるのが上手だね」

やべえ…。

結構…キレてる？

よし、とりあえず話題を変えよう。

「そーいえばよ、何で風紀委員が応接室使えてんだ？まだ委員会では部屋は持てないだろ」

「…僕が言っただよ、ちょうど君が転入してくるのに合わせてね」

「なぜオレが来る時と一緒に……」

「君は楽しめそうだったからね。僕が特定の場所において、いつでも君を呼び出して咬み殺せるようにしておきたかったんだ。」

それに、元から次の委員長会議でそうするつもりだったから」

…ワー、サスガ！ワガマイインチョウ！

「で、仕事してね」

「ふざけんな。全力で拒否する」

あ…しまった。

つい思ったまま言っちゃった…。

うん、殺気が溢れてるね♪

「オレ、なんか嫌な予感するから帰る！！んじゃな！」

「待ちなよ…ハア。相変わらず逃げ足速いね」

オレは世界新記録を超えるような速さで逃げた。

ってか、こんな暑い日に見回りなんてことは絶対にしたくない！！

（注：南は一回も風紀委員の仕事をしてません。）

プルルルルルル…。

「電話…？隼人じゃん」

隼人からの初電話だな。

「もしもしー？どした？」

『10代目に聞いたんだけどよ、頭良いつて本当か？』

「まーな。んで、それが何？」

『ちょっと…分かんねえ問題があつてよ…。今から10代目の家来れるか？』

す…素直…!!

分かんないってハッキリ言つた!!

「おう！すぐ行く！じゃ、後で『あのよ…』ん？何？」

少しの間を空けて、隼人は小声で再び話した。

『…今、アイツもいる…。オマエが嫌なのはよく分かるんだけどよ…しよっちゅうオレのこと見てきてウゼエし、できるだけ早く来れねえか？』

…アイツいんのか…。

アイツは隼人のこと好きらしいから…隼人は今、地獄だな。うん。

隼人でも解けないなら時間かかるだろうし、ちゃっちゃと行って、解いて、帰るか。

「ああ、わかった。…とりあえず、頑張れ」

『…サンキュ…じゃな』

ピッ

仕方ねえな…。

そして、一回だけため息をつき、沢田家に向かった。

ピンポン。

「おじゃましてーす」

沢田の家に来るの、二回目だなー…。

オレ的には、あんま嬉しくない。むしろ嫌だ。

ま、もうなかなか来ないだろ。

「よっ隼人」

「おう。早かったな」

「か…風間？」

「「風間さん！！？」」

あ、オレ↓隼人↓山本↓沢田の順な
(ツナと一緒に咲も言ってます。)

それにしても、隼人はオレが来ることを知らせてなかったのか？

ま、別にいいけどよ。

「早速だけどコレだ」

ピラッ、と見せられたのは問7。

おいおい…こんなのを解こうとしてたのかよ…。

「…何でこんな問題解いてんだ…？」

「あ、その…オレ達の宿題なんです…」

沢田達つつと…三枚あるし、沢田、山本、アイツだな。

補習で出されたのか！。

「解けるんだけどよ…こりゃ超大学レベルだな…」

「『『『！？超大学レベル！？』』』」

うるさ…。

「ああ…答えはー。」

ネコジャラシの公式で『4』だな」

こんなのを補習の課題として出すなんて…教師も解けるかどうかギリギリだぜ？

「ネコジャラシの公式って何だ？」

「隼人はもしかしたら知ってるかと思ったんだけどな…。

んー、コレが公式な」

サラサラッ。

「
…？」

「あ、説明するよ。」

コレが元で――
――

んで、公式になる」

「なるほど…」

あー、周りは全く理解できてないな…。

ま、別に関係ねーしっか。

「とりあえず、答えは4だろ？」

なら、それだけ書いときゃ大丈夫なのな」

山本…本当は途中式も書かなきゃダメだけどな…。

「んじゃ、オレは帰るな」

「待て」

「…オレ、早く帰りたいのに何の用だよチビちゃん」

本当だぜ？

さっさと家に帰ってダラダラとしたいんだからさ。

「何でネコジャラシの公式を知ってる…」。

「これは大学でも習うか習わないかの問題だぞ」

「オレの前のガツコは超一流なんだよ。」

聞いたことねえ？小、中、高、そして希望の奴は大学と大学院までエスカレーター式の学園」

十雅に、オレの通ってた学園はこの世界でも存在させたってことを聞いた。

同じレベルとして、だ。

「南…それって『帝都王儀林学園』か？」
ていとおつぎりんがくえん

「あ、さすがに分かった？」

そう言うと、山本（と、咲）の顔色が変わる。

「え…！？あの帝王かよ！？」

「そーだけど？」

「て…帝王？」

沢田は知らねーの？

「ツナ知らないの？日本一の学校で、世界でもトップの学校だよ？」

あーあーあーあーあーあー…。

今、何か聞こえた？

聞こえたとしたら、気のせいだぞ！？

「まさか…あの帝王ー！！？？！？」

「で、でもよ南…何で並中なんかに来たんだ？」

あ、隼人が沢田の言葉無視したよ…。

「オレ、もう帝王の大学院のテストを満点取っちまったんだ。

そんで、中学に最初は行ってたんだけど…。

つままないから、それならフツのガッコ行こうと思ってな」

あ、この世界のオレの情報は前世の続きになってるんだとよ。

情報を入れておいてくれてよかったよ…。

オレは前世で満点取っていて、自由登校になってたんだ。

あ、制服は男子はズボンで女子はスカートかズボンか自由だったんだ。

高校までだけだな。

そっからは私服…って決まりだったハズだ。

んで、どのくらい頭がいいかはネクタイの色で決める。

小学校は赤。

中学、青。

高校、黄。

大学、緑。

大学院、橙。

って決まり。

オレは紫。

これは大学院をクリアしたレベル。

初めて作った色らしい。

緑までなら今までに2人いたんだとよ。

まあ、その2人も超ガリ勉で高3の二月に取ったってウワサだった
が…。

ただ、帝王のレベルだから…。

帝王の赤ネクタイをしてる奴なら普通の高校くらいの問題はヨニーで解けるレベルだ。

あ、オレはメンドイのが嫌いだから勉強してないぜ？

「やっぱ南か…」

隼人？何がだよ。

「何が？」

「これだ…見てみる」

渡されたのは、雑誌。

見開きが開かれてる。

『帝王の大学院をわずか11歳で卒業!!
今までの、そしてこれからの人類の中でトップの天才!!ミナミ・
カザマ!!』

…なんじゃこりゃ…?

オレの写真とか載ってるし…。

写真はダラダラしてる時のけど、インタビュー記事がオレの言葉
とは思えない気持ち悪さ。

うえ……気持ち悪…。

「…オレ、こんなインタビューされた覚え無い…それに、このインタビューの答え…キモ…」

「オレも最近読み返したら見つけて、違うと思ったんだけどな…。

でも顔がオマエだから、会って聞こうと思って持ってたんだ」

ん……………インタビュー…？

「あ…思い出した」

「やっぱ南だったか？」

「いや、オレが大学院の卒業証書貰って一ヶ月位経った頃、メチャクチャ人が来て…。

追い払ったんだけど一社だけしつこいから、『勝手にやれ』つつたんだよ。

でもこんな風になってるとはなー」

そーだったよー…。

にしても、気持ち悪すぎるな。

うん。イラつく。

「やっぱなー…って南って世界で一番頭いいんだぜ!?

何でそんな性格なんだよ!! 自慢とかもしねーし…」

「メンドイから」

「『『『『』』』』』」

おいこら、納得すんなら聞くな。

(南は基本、この中では隼人以外の人に反応しません。)

「やっぱな。じゃあもう帰っていいぞ」

やっぱりなっと思っなら呼び止めんなよ…チビちゃん。

「ハア…じゃあ帰る」

こうしてオレが帝王に通ったことが広まった。

同時刻、職員室でもバレた…。

応接室の人は、とくに知っていたらしいがな。

Episodio 13 二期開始！

「くそう、くそう！雲雀のアホ——！！！！！！」

只今全速力で登校中。

何で走ってるのかって？

「書類整理なんて、死んでもイヤだああああ——！！！！！！」

という訳だ。

そうそう、今日から二期なんだ。

夏休み…特に何もしてねーな。

問7を解いたりしたくらい？

他は…。

あ、またイタリアに行って、VARIAの奴らと遊んだな。

ま、それも一回だけだったけど。

「確か…体育館で朝会だっ！」

校門での時間はセーフ。

だが、風紀委員は朝会の時にいなくてはいけないらしい。

「着いたあぁっ！！」

ガラス、と体育館のドアを開けたら生徒が皆こっちを見て、静かになる。

「雲雀イイ！！セーフだから書類整理やんねえからな！」

珍しく群れを見ても怒っていない雲雀を指差して言う。

その時――。

キンコンカーンコン。

「うん。ギリギリセーフだね」

雲雀の許しが出た。

「よしっ！！危なかったあっ！」

思わずガツポーズ。

「でも、廊下走って来ただろうから書類整理やつてもらつよ。

今まで逃げた分もあるから」

「イヤだ！！オレは今日忙しいんだ！」

実際は何も忙しくないけどな。

「じゃあ何が忙しいのか言ってみてよ」

「あれとか…これとか、それとか…」

「用事ないのは分かってるんだから、諦めなよ」

「イーヤーだああ！！そつそつだ、隼人！！今日オレ用事あるよな！？」

何かテキストに言ってくれ！

「オ、オレに振ってんじゃねえ！10代目に迷惑かかるだろ！」

「何でオレ——！？」

沢田は白目になっている。

「ダメだ！沢田は今日ボクシング部に来るのだ！！」

うるさ…。

「笹川了平か…。別にそれは自由にすれば？」

「うむ、それならいい！！」

勝手に話しかけて、勝手に解決してるし…。

何だコイツ…。

「沢田、今日オレ用事あるよなっ！」

「君が無理やり用事作ったって、無駄だよ」

雲雀は黙っとけっ！！

「そ、そうだ！オレはこれからイタリアに行かなければならないんだ！とゆーわけで…」「うるさいよ」「」

…うるさい、はないだろ…。

オレが頑張って用事を考えているのに…。

「風間南、仮に君に用事があったとしても、書類整理はやらせるからね」

「イヤだあああああ」

教師も生徒も、朝会始められなくて困ってるけど、それどころじゃ
ねえっつー！！

…こうなったら道は一つ！！

「なら逃げるっー！！」

オレはそのまま体育館を飛び出した。

「後で咬み殺してあげるから安心して」

「安心できるかアホっ!!」

このまま家にいてもダメだしな…。

まずは教室に行くぜ!!

そして放課後――。

「うわああああっ！！来るなあああ！！！！」

雲雀との鬼ごっこ続行中！！

朝からずっとだぜ？

いい加減、体力が…。

でも、途中で休んだりしてるけど。

オレは今外を走ってる。

お？前に何部かのジム！！

ひとまずここに隠れるぜ！！

ボタン！！

ドアを開けて侵入。

「あり…？」

中では笹川了平と沢田が互いに死ぬ気になっていた。

それだけではなく、隼人、山本、笹川京子、リポーン^{チじちゃん}、ボクシング部員。

それと――

――あの女。

「南！？何でここに来たんだよ！」

隼人…今沢田が頑張つて笹川了平と戦っているけど、それは無視？

「書類整理から逃げたら雲雀に追いかけてる。ひとまず隠れさせてくれ」

「そ…そーゆーことが…つかまだ逃げてたんだな…」

本当は見たくないんだけど、今回は沢田の死ぬ気をじっくり見るか。

「入れ入れ入れ入れ！！」

「やだやだやだやだ」

笹川了平のパンチを避けながら断る沢田。

…変な状況だ…。

しかし、勝負は決まる。

「断る!!!」

「ぐはああ!!!」

ガツ、となかなか強い沢田の右パンチが笹川了平に当たる。

殴られた笹川了平は窓ガラスを割るほど飛んだ。

しかし――。

「ますます気に入ったぞ沢田!」

「!!!?」

「お前のボクシングセンスはプラチナムだ!!!必ずむかえにいくからな!」

「もーお兄ちゃんうれしそうな顔してー！」

…変な兄妹だな…。

それしか思うことねえや…。

「京子ちゃんのお兄さん、大丈夫ですか!？」

何でオレがまたあの女が存在を…。

いやいや、見えない、見えない、聞こえない。

「おう!!京子の友達か！」

見ての通りオレはピンピンしてるぞ!」

血流しながら言えるセリフじゃねえぜ？

「オレも気に入ったぞ笹川了平」

「!？」

「おまえファミリーに入らねーか」

ああ、またスカウトしてるよ…。

オレは今のうちに…。

「おまえもどうだ？風間」

……。

「何度言われようと答えは同じ。断る」

「何で嫌なんだ？」

「だから、オレはメンドイのが嫌いなんだよ。あと、ウルサイのも嫌いだから断る」

本当だぜ？

オレはこーゆーのが嫌いなんだ。

「またそれか…。まっいつか必ずファミリーに入れてやるぞ」

「何度でも断ってやるよ。んじゃーな」

オレはもう放課後だから帰ることにした。

だが、問題が一つ。

そして四時間後。

「こ…これで最後だな…？」

「うん 早く終わらせてね」

「うう…」

そして、ポン、とハンコを押す。

「おおおおおお終わった…」

もう肩がイカレそうだ…。

「じゃあ早く帰る準備してね」

「送ってくれんの？」

冗談で言ってみた。

「見回りのついでだよ」

中学の委員会で見回りすんのかよ…。

「とりあえず、サンキュー」

「じゃあ校門に来てね」

雲雀はさっさと応接室を出て行った。

「ってか、荷物これだけだし…」

オレの荷物は、カバン、財布、携帯、小型パソコン。

筆箱や教科書なんてオレにはない。

たまーに授業を受ける時は、教師が渡してくるからな。

カバンを取り、雲雀の後を追う。

「んで…？なんで君は中学生なのにバイク持ってるのかい？」

校門の前にはバイクに乗っている雲雀。

「並盛のボスは僕だよ？」

「ああ…そーでしたね…」

もう何言っても無駄だ…。

「早く乗りなよ」

「ハイ？」

聞き間違いだよな、うん。

「早く乗りなよって言ってるんだけど」

…どうやら聞き間違いではなかったようだ。

まさかバイクこれで送られるとは…。

「ハア…乗らなかつたら殺されそうだし、乗るよ…」

そして後ろに乗る。

「行くよ」

ビュウウウンッ！！

「おいおい！！速度出しすぎだろ！」

「僕にそんなもの関係ないよ」

でも速すぎる…が。

「うつひょうっ、オレこーゆーの好きだから楽しいぜっ」

オレ、絶叫系大好きなんだぜ！

「君に楽しんでもらっ為じゃないよ」

「まあまあ。お、もう家か」

あっという間にマンションが見える。

「着いたよ」

マンションの下でバイクを止めた。

「ありがとなー。んじゃ」

何も言わずに雲雀は帰ってく。

「っと。コンビニ行って飯買ってから帰ろ」

マンションの向かい側にあるコンビニに向かって歩き出した。

Episodio 14 誕生日を迎える！

只今、9月6日の夜11時。

普通なら家で寝ている時間だ。

でも、今日は違った。

理由？

……あのワガママ委員長・雲雀に呼ばれたんだよー！

電話が来たんだ。

『今から並中の屋上来て』

それだけ言って切られた。

…何のために？

しかも屋上？

……やはり、雲雀が何考えてるのかなんて分からないな。

理解する気もないけど。

「やっと着いた…」

ギィ…。

屋上へのドアを開ける。

「遅い」

…いましたよ。

何か安心したよ…。

すっぱかされてると思ったからな…。

「遅いも何も…。ちゃんと十分以内に来たけど？」

いつも十分以内だからな！。

それに、オレ寝てたんだぜ？

やっぱり雲雀はワガママ大魔王だ。

「じゃあこれからは五分以内に「すみません、もう言いません」ならしいよ」

五分以内？

ムリだし、イヤだし、メンドクサイし。

あ、この言葉気に入った。

『ムリだし、イヤだし、メンドクサイし』。

うん。

オレのモットーにしよう！

ん？モットーでいいのか…？

まあいいや。

ああ、空がキレイだ…。

星一つも浮かんでないけど、月だけは見える。

…最高ではないか。

ああ、オレ星って無駄にチカチカしてて嫌いなんだ。

『死んだら星になる』？

オレはそんなの信じない。

第一、十雅から死んだらどうなるか聞いたし。

「ねえ、何ボーっとしてんの？」

「んー？空がキレイだなーって思って」

雲雀も空を見上げるが、一度見て、再びオレの方に向いた。

「星一つも出てないけど…」

「星なんて無駄にチカチカしてるだけじゃねえか。オレが好きな月だし」

「ふうん…。まあ確かに月はキレイだね」

雲雀は再び空を見る。

「委員長！！」

ドアを開け、草壁さんが入ってきた。

「何？」

「用意できました。それと、あと五分です」

？

何か用意してたのか？

それに『あと五分』って何が？

「分かった。今から行く。君も行くよ」

「え……。まあいいや」

雲雀から睨みつけられたのは言うまでもない。

「ってかどこ行くんだよ」

草壁さんは何も言っていなかったのにコイツ知ってるみたいだし……。

「ついてきたら分かるよ」

「……」

イラっとしたのは、気のせいではないだろう。

「…応接室？」

雲雀が止まったのは、応接室の前。

「うん。入れば？」

「…なんか嫌な予感するんだけど…」

雲雀から言われて良かったことなんて何も無い。

「今日のことを企画したのは草壁だよ」

「じゃあ入る」

草壁さんなら大丈夫だろう。

ガラッ。

パパパパパ——ン…。

「お誕生日、おめでとうございます……」

「…は？」

ドアを開けたらクッカーを浴びた。

？

「誕生日？あ……」

時計を見たら、ちょうど12時。

日付は9月7日。

「風紀委員って、マメな人だったんだな……」

これしかオレは言えなかった。

だってよ、雲雀率いる風紀委員だぜ？

ビビる…。

「君もこれで13か」

「うお？！」

あの…あの群れるのが大嫌いな雲雀が…。

この群れを許してるよ…！！

「僕は眠いんだ。早く終わらせてね」

…オマエが呼んだんだよなー？？

「雲雀！！」

オレは両手のひらを雲雀に見せる。

「何？」

「プ・レ・ゼ・ン・ト！！」

「…」

何もくれねえのかよ…。

「じゃあ『特別委員』」

「は？」

何て言った？

「だから、君を『風紀委員会特別委員』にしてあげるよ」

「嬉しくねえよ!!」

「もう決めたから無駄だよ」

「……」

…こんな勝手に嬉しくない誕生日プレゼントを渡されたよ…。

ああ、空が青いな。

他の人には夜だから真っ暗に見えるかもだけど、今のオレには真っ青に見えるぜ。

あ、真っ青ってのもキモイな。

「じゃあ…」

こんなに勝手な奴ならオレからも言ってやる！！

「オレ、これから雲雀のこと『ヒバリン』って呼ぶからな」

ふっふっふっ…。

これは、『吸血鬼ヒバリン』の『ヒバリン』だ!!

アニメを思い出したんだよ!

「咬み殺すよ?」

「じゃあ恭弥でカンベンしてやるよ」

咬み殺されるのは嫌だ。

それに、凧と隼人、大切な人はみんな下の名前で呼び捨てなんだし。

「…」

お?何も言わないってことなら許可したってことか?

「それなら僕も呼び捨てにするよ？」

「別にいいぜー？」

隼人も凧も、呼び捨てだし。

「あ、じゃあこの腕章も付けてね」

雲雀…否、恭弥から渡されたのは腕章。

でも、何も字が書いてない。

風紀委員の腕章の『風紀』って字を消して、黄色の部分を緑に、赤い部分を青にした感じだな。

「2つ付けると…?」

「うん。『風紀特別委員』ってことだからね」

…やっぱ嬉しくねえ…。

「じゃあこれからは特別委員って呼ばさせていただきます!!」

「え…、いや…それはナシで…」

草壁さん、それだけは嫌だ…。

「しかし…」

「い、いままで通りでいいッスよ…？」

ただでさえ、『風間さん』ってさん付けされてるんだ…。

「しかし…」

…そんなに『特別委員』ってスゴいものなのか？

オレには理解できない。

「じゃあ命令な。絶対に今まで通りにしろ」

少し殺気を込めて言ってみた。

「わ、わかりました!!」

ん、冷や汗流してるな…。

悪イ、悪イ。

「じゃ、オレ疲れたから帰るな…」

「うん。ああ、今日の委員長会議に君も出てね」

恭弥が言ってる委員長会議ってのは確か、各委員代表一名のみじゃなかったか!?

…風紀委員から二名でいいのか?

「はあ…あ、じゃあ代わりにしばらく仕事なしで」

「まだ一回しかやってないのに、よく言うよ…。まあいいよ。ちゃんと出ればね」

へいへい。ちゃんと出ますよ。

「「「お疲れ様でしたア!!」「」「」

……ヤクザのボスカい、オレは。

「じゃあね」

…うん、恭弥くらいサッパリした感じで充分。

オレは家に帰った。

朝――。

携帯にメールが二通届いていた。

隼人と凧だ

内容は『誕生日おめでとう』。

ああ、ありがたいな…。

二人に返信をして学校に行く。

新しい腕章は嬉しくないけど、誕生日プレゼントとしてちゃんと付けて行った。

で、今日は委員長会議があるんだった…。

それまで応接室で昼寝してよ。

この時、オレは予想してなかった…。

「……まさか、寝過ぐすとは……」

そう、寝過ぐした。

あーあ……やっちまった。

ま、いいか。

……何でかな？

廊下から殺ころ気がするんだ。

ガラッ。

「よ、お疲れさん」

「君さ…あれだけ言ったのに来なかったね……」

そう、恭弥だ。

「さっき留守電で伝えたけど、寝過ごしたんだって。だからまあ、どんまいだ」

「ハア…いいよ、別に。予想通りだから」

「…なんかヒドくね？」

「君が今まで、素直に仕事したことある？」

「ない」

「……だから、どうせ今回も仕事しない、ってわかってたんだよ」

まー、確かにそうだな。

「それじゃ、僕はまだ仕事あるから」

「ん、じゃな」

恭弥は部屋を出て行った。

応接室でする仕事じゃないんだなー。

それからグダグダしてたら電話が来た。

「ったく…誰だよ」

少しイライラしながらも通話ボタンを押す。

「もしもしー？」

『オマエ、今どこだ？』

…
チビちゃん
リボーンか。

「応接室だけど？」

『…風間は風紀委員なのか？』

「だったら？って腕章見たことあるから分かるだろ」

まさか、バカだとは思わなかった。

『確認だ。オマエがファミリーに入りたがらないのは、風紀委員があるからか？』

…何でそーなる…？

そこまでして、オレをファミリーに入りたいのかよ…。

「全く関係ねえよ。何度言おうがオレはマフィアになるつもりは無い。諦めな」

まあ、関わることになりそうな予感するけど、それは言わない。

『…そーか…。だが、オレは諦めねーからな』

それだけ言っただけで切れた。

まったく…何だよ。

再びソファで眠ろうと欠伸した時、扉が開いて恭弥が入ってきた。

「ふ、ほっほほほわっはんは」

おお、欠伸^{あくび}しながらだから言葉になってねえな。

「なに言ってるのか全くわかんないんだけど」

「仕事、終わったのか？」

「今のはね。でも他の仕事が溜^{ため}まつてるからまた仕事だよ。君のせいで」

溜^{ため}め息混じりに言ってきた。

「棘^{とげとげ}々しいなー。オレは『特別』委員だから仕事しないの」

「そういう意味の特別、じゃないんだけど……」

そして、また溜^{ため}め息をついた。

「じゃあどーゆー意味の特別だよ」

「君は縛られたりするのが嫌いみたいだから、他の風紀委員に比べ
て自由なんだよ。服装や、登校時間がね」

あー、風紀委員に入る時の条件か。

「ふーん。ま、いいや」

紅茶とクッキーを取ってきて、ソファーの前にある机に置く。

紅茶とかは応接室にあるんだぜ？

その時だ。

ガチャ…。

「へ〜。こんないい部屋があるとはね——。」

山本と隼人が来た。

何しに来たんだ？

「君、誰？」

あらら…恭弥はかなりイラついてるな。

ま、そりゃそつか。

じぶんのばしょ
応接室に勝手に入ってきたんだから。

隼人、恭弥を挑発すんなよ…？

挑発したら、タダじゃ済まないだろうし。

「なんだあいつ？」

「獄寺待て…」

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

「……んだとてめ——」

「消せ」

ピュッ。

へー、恭弥も優しくなったもんだ。

最初っからボコらず、タバコだけ潰すなんてな。

「南!？」

お、気づいたか。

「南、何でそこにいるんだよ!」

「オレ、風紀委員だぜ? んで、応接室でまったりしてた」

隼人は知ってたと思うんだけどな!。

「へー。はじめて入るよ、応接室なんて」

するつ。

お、沢田が来たか…。

「ね、ねえツナ…？」

…何か聞こえた？

オレには聞こえなかったなあ。

「までツナ…！」

「え？」

「1匹」

ガッ。

うわぁっ。

まあ沢田はいいんだけど…。

問題は……。

「のやろお！！ぶっ殺「隼人待て！！」？」

そう、このバカ隼人だ。

オレは叫んで隼人を止めた。

「恭弥も待てっての!!」

オレは止まった隼人に殴りかかろうとしている、恭弥のトンファ―を掴む。

全く…コイツら……。

「…何のつもり？南…」

「最初に風紀委員に入るときの条件。

隼人はオレのダチだから、手出し禁止な」

「
…」

恭弥は止まったか…。

んで、 またもや問題は…。

「南！！コイツは10代目に手エ出したんだ！邪魔すんな！」

こちらも、 またもや隼人だ。

「…分かった。オレは一度止めたからな」

隼人には沢田関連で何言っても無駄だ。

「それじゃあ、再開しようか」

恭弥も隼人と戦う気になっている。

…これ以上は、ダメだな…。

そして、隼人はやられ、山本もやられた。

うん、あっという間だった。

で……存在を認めたくないが、あの女は？

部屋を軽く見回すと、いた…。

入り口に立っていて、自分が攻撃されないように廊下にいる。

……何だよ……。

なら、来るんじゃないエよ……。

沢田達と関わることが、危険と隣り合わせだということはわかって
関わってんだろ……？

それなのに、いつも一緒にいるよな……？

なら、なぜ今助けない……？

オマエにとって仲間は…友達は、その程度のものなのか…。

……だから、オマエは嫌いなんだよ…。

他にも嫌いなことはあるが、これが何より嫌いなんだよ…!!

オレがイラついてる間に沢田は目覚め、死ぬ気になっている。

沢田だって、隼人と山本を守ってる。

なのに、オマエは何だ？

殺意が出てきた。

ピタ。

恭弥と沢田の戦いが止まる。

二人…いや、窓の外にいるリボンチビちゃんもオレを見ている。

「南…？どうかしたの？」

下を向きながら殺気を放っているオレに恭弥が話しかけた。

「…何でもない」

「…そう。ねえ、君にはもう飽きちゃったな。

そこにいる君、相手になってくれない？」

沢田のことが飽きたのは、オレの殺気を感じたからだろう。

恭弥はリボーンチビちゃんに殴りかかる…が。

まあ、止められた。

いつも頭に乗ってるカメレオンが変化したものによってな。

「ワオ。素晴らしいね、君」

「おひらきだぞ」

爆弾！？

そんなもん投げられたら、応接室もボロボロになるし、オレも怪我

するし！

オレは急いで爆弾を奪い取る。

…間に合え！！

ヒュッ。

爆弾を思いっきり外に投げる。

ドカーン…。

「ふうー…。おいチビちゃん、こんな危ねえモンを使おうとするな」

「チッ…」

おいおい、舌打ちかよ…。

「じゃあな」

ぴょん、と窓から降りて出て行った。

恭弥は追わなかった。

沢田、隼人、山本…あの女も消えていた。

「…ねえ」

「？」

いきなり恭弥が話しかけた。

「あの爆弾に反応できたの？」

「ん？まあ……」

…ヤバいことしちまったか？

「ふうん…。ますます南を咬み殺したくなってきたよ」

嬉しそうに、妖しく笑いながら言う。

「…オレは嫌だからな」

嬉しそうな恭弥を止められそうもないので、急いで応接室を出た。

Episode 15 体育祭！

明日はいよいよ体育祭。

オレは、風紀委員…いや、風紀特別委員だからかなり忙しい。

恭弥のヤツ、オレに単なる面倒事係を押し付けただろ…。

何がそんなに忙しいのかって？

まず、一週間前から予算を決め、各委員会との話し合い。

そして、ルールのチェック、出場選手の種目チェック、e t c、e

t c
∴。

「草壁さんより忙しいじゃねえかよー!」

草壁さんも副委員長だから忙しいってことを聞いた。

でも、その比じゃないくらい忙しい。

「これで最後です」

オレには五人手伝いが来た。

それでも、昼寝ができない程忙しいのだ。

だから最近は授業は受けてない。

まあ、いつも受けてないが…。

でもその仕事を教室でやっている。

周りの目が痛いよ…。

隼人が『手伝うぜ』って言うてくれたけど、遠慮した。

なぜかって？

…全部オレのサインが必要だから意味ないんだよ…。

「…まだあんのか…？」

さっき最後だつて言つてたけど、新しい紙を大量に持った人が来た。

「…すみません…。ですがこれは我々でも大丈夫な物ですので、お帰りください」

「おおマジか！！なら頼んだ！」

オレは急いで帰る。

だつてさ、また持って来られたら嫌じゃん。

そしてそのまま帰宅完了。

明日、このままサボ…いやいや、ダメだ…。

さすがに明日サボると恭弥がうるさそうだからな。

ソファァーで横になる。

「…なんか…眠い…」

よっぽど疲れてたのか、そのまま寝てしまった。

プルルルルルル…。

「電話…」

せっかく気持ちよく寝てたのに…。

ピッ。

「もしもし…」

『今日は朝から仕事あるから、早く来てって言ったよね？』

…恭弥ですよ…。

ってか、そんなこと言われ……………たな…。

「悪い…何分以内？」

『今なら20分』

おお？

意外と時間あるから、風呂入る。

「分かった。じゃな」

電話を切り、急いで風呂に入る。

そして学ランに着替え、残り五分。

「やべっ…走って行かなきゃ…」

…体育祭始まる前から疲れそうだ、コリャ…。

まあ競技は出ないけどな。

「間にあつたか!？」

応接室のドアを勢いよく開ける。

「うん。セーフだね」

「フー…」

よかった、よかった…。

でもさ、ここからが忙しいんだよな…。

「はい、書類」

「……………どうも…」

朝っぱらから書類…。

何の嫌がらせだろうな…。

ああ、昨日に比べたら少ないかな？

「それをあと一時間で終わらせてね」

「……………」

文句言う気力も失せたよ…ハア。

一時間後。

「おーわーったアアア！！！！」

何とか終わった…けど体育祭開始まで30分…。

「屋上行って、サボってよ」

これなら仕事が増えてもサボれるぜ」

そして10分後の応接室――。

「南…逃げたね…咬み殺す!!」

何も知らない南は寝てました。

『只今から、並盛中学体育祭を開催いたします』

「ん…」

放送の声で目が覚めた。

もうそんな時間か…。

まっ携帯に恭弥からの連絡はないから寝てよっと」

『プログラム一番、選手全員による準備…ひひひひひ雲雀さん!!…?』

…聞かなかったことに……………。

できないな。

何やってんだ？恭弥…。

わざわざマイク使って言うことでもあんのか？

『南…逃げたお礼をしてあげるから出てきなよ』

ヤバイ！！

行かなくては！！

え？どうせ咬み殺されるから隠れてればって？

10で済むのを100にしたいくはない。

急いで屋上から出て、グラウンドに行く。

わー、皆揃ってるよ…。

「それじゃあ早速咬み殺してあげるよ」

トンファーを構え、言ってくる。

さあ、やっぱり逃げようか♪

「来るなああ——！！！！」

……嬉しくない鬼ごっこ開始ー！

「いくよ」

そう言ってトンファーを振り下ろしてくる。

ビュッ。

ひゅっ。

ふー、ギリギリで避けたよ…。

すると、突然脳内に声が響いた。

『南！』

『ああ？十雅、今オレ忙しいんだけど！』

『前に言ってた刀、完成したぜ！』

おお、マジか！

一瞬恭弥から隠れられれば刀貰って応戦できるな！

『じゃあ、すぐに貰うから準備しとけ！』

『お、おう!』

ふー、これでどうにか戦えるな。

「君…いつまで逃げる気？」

「さあな!」

そして校舎の陰に隠れる。

「十雅! よこせ!」

小声で十雅を呼ぶ。

「ほら、これだ！」

一瞬にして十雅が現れ、漆黒の刀を渡された。

全てが漆黒の刀だ。

「ど…どうだ…？」

十雅がビクビクしながら聞いてきた。

な、もう何回ダメ出したかわかんねーくらいしてるからな…。

「これで合格だ。さっさと姿消せ！」

「ああ」

十雅は姿を消した。

「見つけたよ」

あー、見つけなくてもよかったのに…。

「！…その刀は何だい？」

「前に風紀委員になる時言っただと思っぜ？」

「ああ、完成したんだ」

何も言わずにトンファーを振りおろしてくる。

ガギン…！

トンファーと刀がぶつかった。

「なー、もう許してくれよー。疲れたし」

「……次はちゃんと仕事してね」

んー、確かにそれしか道はないな。

「わあったよ。んじゃ、またな」

そのまま校舎に入る。

そーだ、また屋上で昼寝しよ。

「…何やってんだ？あのバカ共は…」

隼人と笹川了平がC組の総大将を潰していた。

…この後処理をするのが誰か、分かってんのか…？

…オレなんだよな！。

棒倒しって結構人気ある競技だから審議になるな！。

めんどくさ…。

そして昼――。

今は審議中。

「んで？A対B・C合同でいいのか？」

提案者である笹川了平に確認する。

「もちろんだ！！」

熱いなあ…。

それ以上にメンドクサイ奴だけど。

つつかバカだろ？コイツ…。

倍差あるのに勝てる気でいんのか…？

「じゃあそれで決定」。審議なんて面倒なのは終わりで解散」

周りは『本当にいいのか?』とか聞こえるけど気にしないって。

そしてすぐに棒倒しが始まる。

合同チームの総大将は恭弥。

A組の負けは更に確実だな。

最初はA組も元気だったが、2対1。

ズガン。

「お、沢田が死ぬ気になったか」

騎馬を作り、圧倒していく。

しかし、些^{ちひ}細なことで終わってしまう。

「おい芝生メット！てめー今足ひっかけたろ！」

「ふざけるなタコ！人の足を蹴っておきながら！」

…やっぱ短気な者同士だと大変だな…。

ま、普通に考えて乱闘だ。

「…グラウンドが壊れませんかように…」

願いはそれだけだ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6945y/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

2011年12月3日18時52分発行